

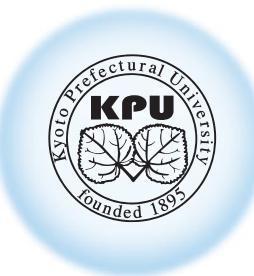
京都三大学教養教育共同化事業

# 令和 2 年度 報告書

時代が求める新たな教養教育



京都工芸繊維大学



京都府立大学



京都府立医科大学

# 目 次

京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践 …2

## ごあいさつ

---

京都府立大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	3
京都工芸繊維大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	4
京都府立医科大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	5

## 第1部 教養教育共同化の展開

---

(1) コロナ禍に見舞われた一年を振り返る（機構運営委員長 総括コメント）	6
(2) 教育IRセンターからの総合報告 – 2020年度（令和2年度）–	9
(3) 令和2年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して	13
(4) 令和2年度三大学教養教育共同化の取組	15

## 第2部 共同化科目の授業研究

---

(1) 先行き不透明な状況で（科目名：文芸創作論）	20
(2) コロナ下にいかに1回生主体の教養教育を進めるか（科目名：日本史）	22
(3) 教養としての「国際政治」とは何か（科目名：国際政治）	24
(4) ゼミナール型授業における遠隔システムの活用方策（科目名：社会科学の学び方）	27
(5) 三大学共同化科目「世界はいま」を担当して（科目名：世界はいま）	29
(6) 「SDGsをまなぶ」の実施報告（科目名：SDGsをまなぶ）	31

## 資料編

---

会議の審議状況	34
---------	----

# 京都三大学 教養教育共同化による 「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践

## 背景

地球環境の危機や一地域の変化が全世界の人々に影響を与えるほどのグローバル化の進展により、社会全体の枠組みが大きくかつ急激に変化している。

現在、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大によって、多くの尊い命が奪われ、生活や産業、経済関係にも深刻な打撃を受けるなど、私たちは今、未曾有の危機に直面している。長期にわたるコロナ対策の継続や経済の行き詰まりは、グローバル化最優先の個人や組織の社会的存在形式だけでなく、対人コミュニケーションや家族関係など個人の生存の在り方まで、その本質の見直しを迫ったといえる。

これらを踏まえて、ポストコロナ社会をどのように築いていくべきか、世界レベルで人間の叡智を結集した検討と取組が必要な状況となっている。

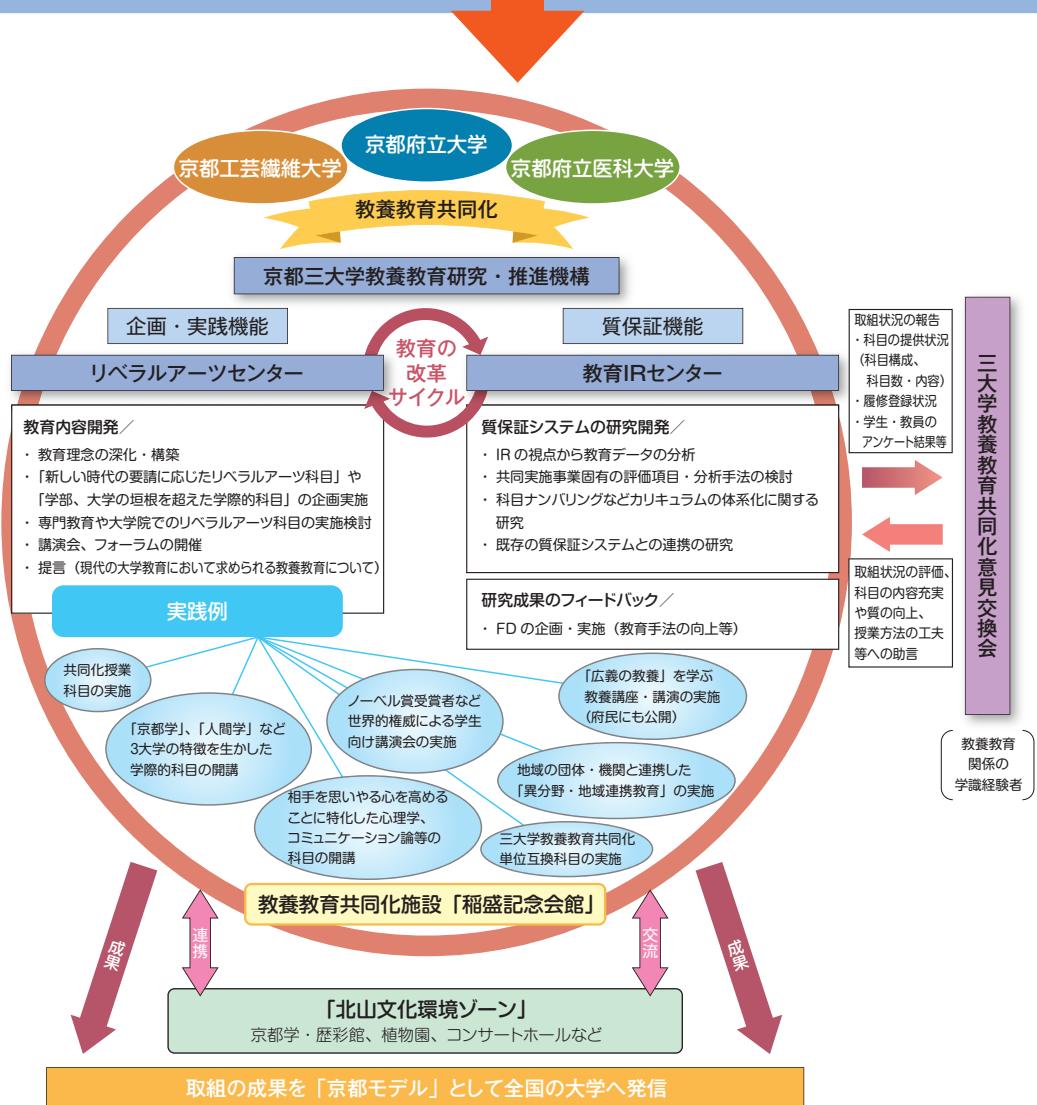
## 取組コンセプト

国公立三大学の教養教育カリキュラムを「共同化」し、それぞれの大学の特徴・強みを生かした質の高い、「新しい時代の要請に応じた教養教育」を実施する。

## 人材養成の目標

次の①～③を備えた人材を養成する。

- ①異なる価値観や視点を持つ他者と協働する力としてのコミュニケーション能力及び相手を思いやる心
- ②自ら問題を発見し、それにコミットするとともに、「正解」の存在しない問題についても、学際的な視点に立ち、多様な見解を持つ他者との対話を通して自身の考えを深め、解決に向かって行動する能力
- ③グローバルな局面で、文化や言語を異にする他者と交流し協働する能力





# 京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治28年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発する創立120年以上の歴史を有する大学です。人文・社会・自然の諸分野にまたがる3学部・3研究科を備えた総合大学であり、教員・学生相互の密度の高いコミュニケーションをベースに、実験、実習、フィールドワークなど質の高い教育を実現しています。また、京都府の知の拠点として、京都地域未来創造センターが中心となり、高度かつ地域社会と密接に連携した研究、府内各地域の様々な課題に応える地域貢献活動や公開講座などを積極的に展開しています。

平成26年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、教養教育共同化施設「稻盛記念会館」で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。

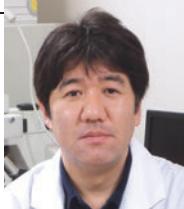
また、平成31年4月から、和食文化を幅広い視点から理解した上で新たな創造を生み出せる人材を育成する、文学部和食文化学科を開設しました。



## 学長あいさつ

京都府立大学学長

**塚本 康浩**



### 音声と映像の講義

本年度はCOVID-19の影響で殆ど全てがオンラインまたはオンデマンドの講義となりました。私は2020年4月から京都府立大学の学長をさせていただいておりますが、引き続き「生命科学講話」を担当いたしました。オンラインの講義でした。みなさんはパソコンで受講されたのでしょうか？それともスマートフォンでしょうか？受講場所も自宅とは限りませんよね。出来るだけ文字を大きく、文章量も少なめにし、代わりに動画を多くしました。もしかしたらネコと一緒に見ていましたかも知れませんね。今後は、Withコロナ、ポストコロナの状態でも今年のようなオンライン、オンライン、対面とハイブリッドという形式の講義は有意義なものとなるでしょう。先生方も良い講義のための資料作りに励んでおられます。時間にとらわれず、理解度の高い、そして無茶苦茶面白い講義が三大学連携により創出されることを期待しております。夏場の動画作成は蝉の声がうるさくて難儀します。カラスも意外と騒がしいものです。

## 副学長あいさつ

京都府立大学副学長  
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長

**川勝 健志**

世界は新型コロナウイルス感染症拡大の影響に

より、今なお混迷の渦中にあります。このような危機に直面した今こそ、専門分野を超えて幅広い教養を深め、世界の動きにも視野を広げていく、そんな教養教育があらためて求められているように思います。

昔からよく「無知の知」ということを言います。現代における教養とは、情報が溢れるほどある中で、自分がいかに物事を知らないのかをまず知ること。自分の引き出しがごく狭いものでしかないこと、世界がとても広いことを実感できるためには、周りを俯瞰的に見渡すとともに、自分のその狭い引き出しがそれでも案外使えると知ること。つまり、己を知るということではないでしょうか。

確かに今、私たちはコロナ禍という未知の難題に直面していますが、程度の差こそあれ、これまでにも正解のない問いに満ちた世界を生きてきたはずです。大切なことはその過程で「何を考え、どう行動すべきなのか」と、自らと向き合う時間を過ごし、解決への道筋を考え抜くことにあるように思います。その経験は、やがて自らを支えてくれる「生きる力」になるはずだからです。

そうだとすれば、大学における教養教育とは、単に知識を伝えるだけでなく、その知識をもとに自分なりに考え抜く力、予期せぬ難題に直面した時でも社会を生き抜く力を身に付けてもらうことではないでしょうか。

三大学教養教育共同化は、そのような力を身に付けてもらうために、各大学の強みと特徴を生かした科目を提供し合い、多様な価値観をもつ学生の学びの幅と深みを広げる知的分業ともいべき試みといえましょう。その発展の成否を握るのは、こうした知的分業を可能にする三大学の枠組みへの信頼感をいかに高められるかにあります。のために、機構運営委員長として、今後も微力を尽くして参りたいと思っています。



# 京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学は、明治時代の工業化や伝統産業の近代化に対応するために1902年に設立された京都高等工芸学校及び1899年に設立された京都蚕業講習所に端を発し、1949年に新制京都工芸繊維大学として発足しました。以来、120余年にわたり日本の産業、社会、文化に貢献する人材を輩出してきました。歴史文化都市である京都は、1200年を超える「みやこ」として、常に新しい「もの」を創出し、革新的な技術を生み出し、磨きをかけてきました。地球上そして日本に様々な問題が噴出している今、創造的挑戦心を育んできた京都という場のもつ力を、工学の研究・教育に活かし実践することが本学のミッションです。そのキーワードが、「京都思考 (KYOTO Thinking)」です。



## 学長あいさつ

京都工芸繊維大学学長

**森迫 清貴**



工科系大学である本学は、TECH LEADER（テック・リーダー）と呼ばれる社会・産業イノベーションを牽引できる能力を有する「ひと」を育てることを人材育成の目標としています。TECH LEADERは、本学の造語ですが、次の4つの工纖コンピテンシーを修得したひとを呼びます。一つ目は言うまでもなく「工科系専門力」です。二つ目は様々な課題を解決に導くことのできる「リーダーシップ」です。これは協働する仲間の中で自己の役割を把握し、チームの目標の実現に向けて推進していく能力です。三つ目は「外国語運用能力」です。日本社会も産業もグローバリゼーションを意識せずに活動することはできません。四つ目が「文化的アイデンティティ」です。自己を認め、他者を認めて心豊かに暮らしていくには、互いに抛って立つ文化を理解し、共有することが必要です。そのためには自己のアイデンティティとなる基盤形成が重要です。専門分野の異なる学生が集うこの場は、必ず役立つと思います。三大学共同で提供される教養授業科目は、「文化的アイデンティティ」の形成のみに関連しているのではなく、4つのコンピテンシーすべてに関係しています。TECH LEADERのベースとなる主体的・科学的に考え行動する思考力・判断力・倫理性などを育むに必要なものです。

令和2年度は、COVID-19のためやむなくオンライン授業となり、三大学の学生が集う機会が大きく失われることになりました。授業評価アンケートや実施状況報告から、受講生、教員からの苦労も伝わってきましたが、授業方法として新たな可能性を感じられました。今後に活かすことが求められます。

## 副学長あいさつ

京都工芸繊維大学副学長  
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

**前田 耕治**

哲学者アリストテレスによれば、「教養は幸運なときには飾りであり、不運なときには命綱となる」（桑子敏雄訳）とあり、教養は逆境に追い込まれたときにでも地位や財産のように失われることなく、最後に人間の身を助けてくれるものであることを教えてくれます。大学は最先端の研究を行いその基礎となる専門を学ぶ場であると考えがちです。しかし真に新しいものを発見した歴史は、学問の直線的な積み上げだけによらず、別の発想にヒントを得ることで飛躍的な発展が生じることを示唆しています。そのような幅広い発想を磨くのは若い年代に越したことはありません。学生の皆さんに将来にわたって「命綱」となる教養を身に付けてもらうために、できる限り広い選択肢を揃えたのが、本学、京都府立大学、府立医科大学が協力して実施している三大学教養教育共同化です。

将来、学生たちが飛び込んでいく現代社会は、専門的な知識・技術だけでなく、創造力、ダイバーシティ、コミュニケーション能力、グローバルな素養など多様な能力を求めており、まさに「教養教育」の重要性が高まっています。昨年度は、コロナ禍により三大学共同の授業科目のほとんどはオンラインで開催となり、学生同士の交流も制限されましたが、多様な形態の中で異なる学風を感じながら学べるのも本共同化事業の特色です。専門が異なる学生が協同し合えるのはまさに教養の力であると感じます。今後も本事業を発展させて、三大学が協力し合って持続可能な共同化の体制づくりに努めます。



# 京都府立医科大学

京都府立医科大学は、1872（明治5）年に開設された京都療病院での医学教育を始まりとする我が国で最も古い医科大学の一つで、来年（2022年）には大学創立150周年を迎えます。

本学では、歴史と実績によって培われた医学・医療技術や高い倫理観を身につけ、患者の立場に立って考える優れた医療人を養成しています。また、多様な学際的研究活動を推進し、次代をリードする指導的人材を育成しています。

本学は、京都府民に開かれた公立大学として、地域医療への理解と使命感を持った医療人を育成・確保するとともに、大学の理念「世界トップレベルの医学を地域へ」のもと、最先端の研究を治療に活かす取組や、健康増進への寄与など、大学の成果を府民に還元するよう努めています。



## 学長あいさつ

京都府立医科大学学長

竹中 洋



京都工芸繊維大学と京都府立大学並びに本学は平成19年から教養教育に関する単位互換科目を開講し、平成26年から本機構を共同で運用しています。その前後の医学教育の変遷は極めて現実的な流れを示しており、平成13年に医学教育モデル・コア・カリキュラムが始まり、平成16年には新医師研修制度が実施され、CBTの義務化とOSCE導入が同時に進行してきました。令和2年度には卒業前のOSCEが卒業条件とされ、医師免許国家試験までの医学教育の流れが具体的に医師法や医療法の定めによって規定されることになります。既にモデル・コア・カリキュラムは歯学、薬学に導入されており、看護学も令和3年度入学生から始まります。このカリキュラムは従来の古典的な座学を中心とした単位制度とは異なり、基本的にはOutcome basedで導入学部は分野別評価を受審することが義務化されています。

医療系ではprofessionalismや生命倫理或いは行動規範、国際的視野の涵養が必須となり、これら多様な教育要素を医学教育の枠組みに取り組むことが求められています。医学も学んでいない新入生に必要な教養とは何か、実はrisk managementなどの社会に出て遭遇する事象への対応に必要とされる学問体系ではないかと考えています。

他学部の学生諸君には医療系のacademiaの考え方やlife scienceの扱い手としての医学に新鮮な興味を持つことが多いのではないかでしょうか。京都府立医科大学は本機構の基本精神に立ち戻って「教養」を提言したいと考えています。

## 副学長あいさつ

京都府立医科大学副学長  
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

奥田 司

三大学教養教育共同化事業は、文部科学省の支援を得て平成26年度に開始された教育プログラムに端を発するのですが、平成29年度からは京都工芸繊維大学、京都府立大学及び本学の独自共同予算による運営となって、少しずつ形を整えながら、全国に先駆ける大学間連携のモデル事業として、高い評価を受けつつ展開してきたものです。

一般に専門性の高い単科大学では、所属する学生は専門領域の殻の中に閉じこもりがちですが、本学は、この三大学教養教育共同化事業によって、学生は三大学それぞれの特長ある教養講義科目を幅広く選択受講できるだけでなく、リベラルアーツゼミナール科目の受講等を通じ、専攻科目や学修目標の異なるさまざまな学生たちと交流することができるという大きなアドヴァンテージを得ることになりました。学生諸君には、こうした機会を最大限に活用して、積極的に交流することで豊かな人間性を築き、みずからの興味に適う幅広い教養を身につけ、大きく成長してもらいたいと思います。

昨年は新型コロナウイルス感染症の蔓延によって国内外が未曾有の危機に直面する中、三大学がお互い力を合わせて課題授業や遠隔授業などを組み合わせることによって、この学びのかたちを維持してきました。本年度も、状況によりますが、安全面と学習効果の両者を勘案し、しっかり対策することによって共同化授業を展開していきたいと考えます。学生諸君の積極的な参加を期待します。

# (1) コロナ禍に見舞われた一年を振り返る (機構運営委員長 総括コメント)

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長／京都府立大学 副学長  
**川勝 健志**

## はじめに

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策（以下、コロナ対策）という未知の難題に直面し、年度当初からその対応に苦慮したまさに試練の一年であった。個々の大学でもその対応に混迷を極めていた中で、三大学で足並みを揃えて教養教育共同化の運営を行うことは、かつてない調整を伴うものであった。

本稿では、コロナ禍に見舞われた一年を振り返り、その対応をめぐる調整プロセスで何を教訓とし、何が問われたのか、最後に若干のコメントを付したい。

## 1. 学期初めの緊急対応

三大学教養教育共同化科目は、通常、学生に初回授業で科目のガイダンスを行ったうえで、履修登録を行っているが、前期はそれを省略し、学生に対しては、「令和2年度京都三大学教養教育共同化科目受講案内」やシラバスを参照して履修登録を行うように指示した。

そのうえで、やむを得ず3回目（4/13、4/20、4/27）までを休講としたが、その期間中に学生に対して、講義資料等を配信するとともに課題を課し、学習の担保や授業の円滑な開始を図った。具体的には、共同化科目担当教員に休講分に相当する教材（講義動画・資料、参考資料等）と「講義資料配布・課題指示等一覧表」（配信する教材の内容、教材を用いた学習方法、課題、課題の提出期限・提出方法、質問がある場合の連絡先・連絡方法、参考書・参考となるウェブサイト等）を作成・提出してもらい、各大学の学生用ポータルサイトを通じて学生に配信した。学生には授業が始まるまでの間、自分で学習を進め、課題に取り

組むように指示した。

一方、担当教員には、学生から提出された課題の採点や講評など、授業開始後に適宜フィードバックして頂くようにお願いした。

## 2. 初のオンライン授業へ

4回目（5月11日）以降の授業は、工織大にご提供いただいたクラウド（Next Cloud）を共同利用して教員・学生との情報共有を図った。その具体的な手順は、以下の通りである。

- ・工織大から各教員にアカウントが発行され、各教員は自ら Next Cloud にナレーション付きパワーポイント資料または動画等の講義資料をアップロードして提供する。
- ・各教員は、その提供内容（Next Cloudへのアクセス URL）を「講義資料配布・課題指示等一覧表」に記入し、授業の前週に機構事務局に送付する。
- ・機構事務局は、それを取りまとめて三大学に送付し、各大学はポータルサイトに掲示して学生に周知する。

前期のオンライン授業は、上記のような手順で Next Cloud を用いたオンデマンド型を中心に行われたが、一部科目は Zoom 等の会議システムを利用して同時双方向型の遠隔授業が行われた。ただし、各大学、各教員の判断で後者を採用する場合には、受講生の通信環境の違い等に配慮するなど、あらゆる受講生が利用可能な方法に限ることを要請した。

授業のフォローアップ等の手法については、各教員に一任し、学生からの課題の回収やフィードバック等は、教員と学生が Next Cloud やメール等を利用して直接行うものとした。

なお、前期の試験は対面方式では行われず、レ

ポート課題もしくはオンライン試験での成績評価を行うことになった（結果的に、オンライン試験は1科目のみ）。

以上が、三大学教養教育共同化の前期コロナ対策の概要である。従来、対面での授業を前提にしてきた三大学共同化科目が突如、オンライン授業へのシフトを余儀なくされた際に最大の論点となつたのが、いかなる情報システムを用いるかという点であった。利用可能な情報システムは、三大学それぞれで異なり、まして機構事務局が独自の共通システムを保有・管理しているわけではなかったからである。言い換えれば、三大学それぞれの学内システムを可能な限り活用しながら、いかにして三大学の学生に同等の教育環境を提供できるかが問われることになったのである。

しかし、学生にとっても教員にとっても、ただでさえ不慣れなオンライン授業のシステムが各大学でばらばらであった場合の混乱は想像に難くない。それゆえに、工織大情報科学センターからNext Cloudを三大学共同化科目のためにご提供いただけたことは、そうした混乱が生じることなくオンライン授業へシフトできた大きな要因の1つになったといえよう。

### 3. オンライン授業の改善

前期の終盤には、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着きつつあったとはいえ、後期も対面授業を再開できる見通しは、楽観視できるような状況にはなかった。また、前期オンライン授業での課題を踏まえて、以下のような点について検討する必要が生じた。

1つ目は、学期途中での対面授業への切り替えを想定するかどうかという点である。共同化科目は、科目ごとに履修定員が定められており、定員

を超える履修希望者がある場合には、抽選で受講者を決定してきた（※各大学には、定員枠が設定されており、希望者がその定員枠を超える場合には、大学ごとに抽選を行い、履修者を決定している。ただし、履修希望がより多く実現できるように、履修登録の状況を踏まえ、各大学の定員枠を調整したり、科目定員を変更したりする場合もある）。

ところが、前期は対面授業の再開を想定し、教室内の学生間の距離を確保するために履修定員を例年の約3分の2に削減して定員要請を行ったため、抽選の結果、履修希望がかなわずに登録できなかつた学生が主に工織大生において多数生じた。そのため、後期の授業は感染症の状況に関係なく、学期を通じてオンラインで行う基本方針を早期に決め、履修定員については削減をせず、例年通りの定員で調整を行つた。

少人数のリベラルアーツゼミを除くすべての授業科目をオンライン授業で行う方針を早期に固めることは、とりわけ大学入学以来、一度も稻盛記念会館で授業を受けたことのない新入生を考えると苦渋の決断であったが、その後の感染拡大状況もさることながら、三大学学生の受講機会の確保という意味でも不可避なことであったよう思われる。

2つ目は、前期のオンデマンド型の授業で生じた課題をいかに解決し、改善するのかという点である。実はNext Cloudを用いた課題の提出・回収方法では、レポート等の課題が確実に提出されたかどうかを学生側では確認することができず、不安に感じた学生が何度も同じ課題を提出する、学生から担当教員や各大学の事務局に問い合わせが相次ぐなどの問題が生じていた。これらの課題を解決するには、工織大ではすでに導入されていたMoodleのような学習管理システム（LMS）

が必要になる。しかし、そのような LMS を機構事務局はもとより他の二大学が即座に準備できるわけではない。前期でも課題となった三大学共通の情報システムをめぐる問題が再び大きな壁として立ちはだかったのである。

幸いにも工織大情報科学センターから Moodle 共同利用のお申し出を頂き、後期の授業開始に間に合うかどうかの瀬戸際での協議となつたが、2020 年 8 月 31 日に「令和 2 年度後学期における京都三大学教養教育共同化科目に係るオンラインでの授業実施に関する覚書」を締結し、三大学としてまた新たな一步を踏み出すことができた。

その結果、後期は三大学の科目担当教員と共同化科目を受講する可能性のある全学生に Moodle の利用に必要なアカウントを配布して、各科目に作られたコースに教員・学生がアクセスすることにより、課題や小テストの出題・管理・回収が容易になるとともに、学生が講義資料を閲覧したかどうか、課題が提出されたかどうかの確認等が可能になった。また、学生への授業内容の事前周知や講義資料等の提供を学生に直接行って頂くことも可能になり、前期には教員にお願いしていた「講義資料配布・課題指示等一覧表」の提出を求めずに済むようになった。

3 つ目は、同時双方向型のオンライン授業を行える環境をいかにして整えるかという点である。前期のオンライン授業では大半を占めていたオンデマンド型の授業は、学生にとっては自らの都合で柔軟に学習できるというメリットがある一方で、こうした学習方法が不得手な学生はついていけず、教員が連絡すら取れなくなるケースも散見された。また教員にとっても、オンデマンド型では学生の反応や学習状況が把握しづらいという問題もあつた。そのため、後期は Moodle を利用したオンデマンド型の授業を基本としつつも、教員が自ら

選択する Zoom 等の同時双方向型の授業の併用も可能とし、試行的に一部科目で機構契約の Zoom アカウントを使用してのライブ授業も行われた。その対象については、機構提供科目の担当教員としたが、各大学提供科目の担当教員であっても、Zoom での授業を希望され、かつ個人所有のアカウントでは授業実施に支障がある場合には、機構契約のアカウントを配布し、ライブ授業を行っていただいた。

その結果、後期共同化科目 39 科目中、ライブ授業は 25 科目、オンデマンド授業は 14 科目と、前期よりライブ授業の割合が高くなつた（※ 1 つの科目の中でライブ授業とオンデマンド授業が混在している場合は、ライブ授業とカウントしている）。

## 4. おわりに

今年度は教養教育共同化を三大学で行うがゆえの難しさをまさに痛感した一年であった。しかし、その教訓からむしろここで強調しておきたいことは、三大学が歓喜を結集して、いかにこの難局から創造的な価値を一緒に作り上げられるかという視点と、そのプロセスで今後繰り返し交わされるであろう議論の大切さである。

試練を乗り越えた先に、私たちは何を見出すことができるのか。2014 年に全国初の試みとして発足した、京都三大学教養教育共同化の真価がいま改めて問われているように思われる。

## (2) 教育IRセンターからの総合報告 －2020年度(令和2年度)－

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育IRセンター長／京都工芸繊維大学 教授  
萩原 亮

### はじめに

当教育IRセンターの任務も4年目となり、そろそろ後任者への引継ぎなどを意識してファイルの整理をしておこうなどと思っていた矢先、虚をつかれるように‘コロナ禍’の嵐に見舞われ、はじめは困惑と戸惑い、後の方では正直に言って困憊を覚えながら、本年度を過ごすことになった。いやが応もなくオンライン授業の経験を積む中、(一講義担当者としては)あらためて悟ったことなどがいろいろあるけれど、さて、三大学教養教育の運営組織の一環にある教育IRセンターとして今の時点でできることは何か、未だよく見えないながら、それぞれ独自の方法・工夫を駆使して今年度の共同化科目担当を進められた教員諸氏に対し、各講義の外側のセンシングに入ってくる情報を(整理不十分でも)示すことには一定の意義があると考えるので、まとまらないことを覚悟の上で本稿を書かせていただく。メモ風あるいは断想的な内容になってしまふかと思うが、何とぞ寛容にご覧いただきたい。

### 1. 実施状況と履修登録者数の推移

はじめに、今回の事態の下、本年度の共同化教養科目がどのように実施されたかを簡潔にまとめておく(より詳しい情報は本報告書第1部(4)に記載されている)。まず、前期科目の受講登録・授業開始のときに最大の激震があった。学年開始早々に、教室の定員を減らし(人の密度を下げ)た形で5月連休明けから対面授業を開始する方針が出され、それに応じて、今年度前期のクラスの受講者数を大幅に制限する措置がとられた。その方針でクラス分けされた後、全ての授業をオンライン形式にすることが決まった。こうした経緯によって、受講者の総数を例年の2/3に圧縮して前期授業を走らせることになったわけである。一方、後期授業については、早い時期(前期の6月)に、オンライン方式に統一する方針を定め、各クラス定員は例年どおりとされた。学生が、前期に履修しそびれた科目数分を、後期に挽回してくれることが期待に含まれていたと思う。

こうしたコンディションの下、結果的にどのよ

うな受講登録状況になったかを観ていく。図1は、大学別総受講者数を、前期・後期別に歴年推移として描いたグラフである。前期(a)における本年度の人数減少は、意外にも、工織大生に集中する形になった(工織大生の前年比減少率は2/3よりもずっと著しい)。対して、府立大と府立医大の減少率は僅かである。工織大生は、希望科目的ターゲットをしぼり、希望が通らなければあえて他科目をとらない動向を示したことが窺える。ところが一方、クラス定員に特段の変更がなかった後期(b)に目を転じると、確かに、主として工織大生の数が増加しているが、前期の減少分を補うほどの変化にはなっていない。結果として、本年度の工織大生の教養科目の履修には(平時の履修に比べて)相当の積み残しが生じたことになる。次年度における特に工織大2年次生の教養科目の履修動向や時間割の組み立て方を注視していく必要があるだろう。

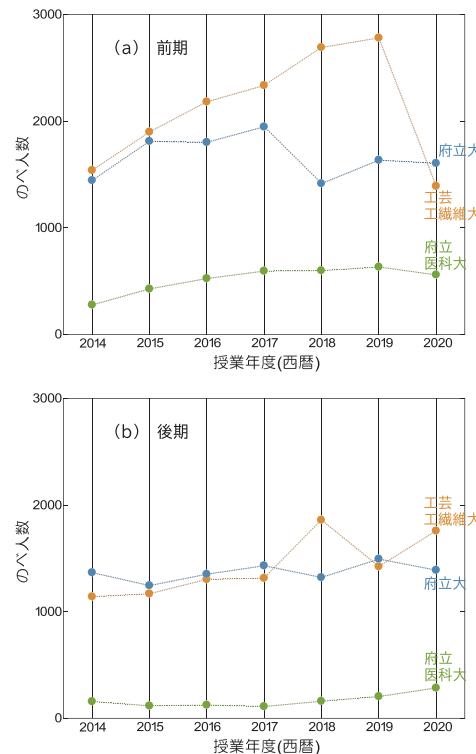


図1. 共同化教養科目全体に対する大学別履修者数の年度推移。(a): 前期科目、(b): 後期科目。

## 第1部 教養教育共同化の展開

(2) 教育IRセンターからの総合報告－2020年度(令和2年度)－

表1. 2020年度開講各科目的履修登録者数の分布状況。ポイントは $\log_2(\text{登録者数}/\text{人})$ の値。(a)前期、(b)後期それぞれについて、過去4年分の平均人数に対するポイントと、本年度ポイントを表示。  
(※:新規開講 †:集中講義 (リベラル・アーツゼミナール科目は含めていない。))

(a) 今年度前期 科目名(順不同)	過去4年の 登録者数 平均のポイント	本年度の 登録者数 ポイント
医療人類学(※)	—	5.93
エネルギー科学	6.39	6.79
化学概論I	6.34	5.93
科学史	7.23	5.93
環境問題と接続可能な社会	6.52	6.71
キャンパスヘルス概論	7.57	6.88
京都の自然と森林	7.53	7.48
京都の文学I	6.49	5.91
京都の歴史I	8.03	7.47
近代京都と三大学	6.20	5.88
現代科学と倫理	4.86	5.95
現代京都論	7.80	6.91
現代教育論	7.48	6.87
現代世界とジェンダー	7.04	6.88
国際政治	5.64	5.91
社会学I	6.76	5.91
食と健康の科学	7.32	6.64
心理学	7.47	6.67
人文地理学I	7.59	6.89
生物学概論I	6.90	6.89
生物学の人間学	6.57	7.09
生命科学講話(†)	9.34	7.50
西洋文学論	5.33	6.70
哲学	6.41	6.71
発達心理学(†)	7.42	6.70
人と自然と数学α	6.82	6.77
比較宗教学	7.48	6.87
美と芸術	7.49	6.71
物理学I	7.04	6.83
法学	—	5.83
ヨーロッパの歴史と文化	7.28	7.44

(a) 今年度前期 科目名(順不同)	過去4年の 登録者数 平均のポイント	本年度の 登録者数 ポイント
SDGsをまなぶ(※)	—	6.51
アジアの歴史と文化	6.59	6.83
意外と知らない植物の世界	5.31	4.81
化学概論II	4.44	5.86
環境と法	6.17	5.78
京の意匠	5.21	6.00
京都の経済	—	6.87
京都の農林業	7.60	7.60
京都の文化と文化財(※)	—	6.85
京都の文学II	6.51	6.41
京都の防災と府民	—	6.83
京都の歴史II	7.59	7.54
経済学入門	6.03	6.88
現代社会と心	7.60	7.60
社会学II	6.87	7.41
宗教と文化	5.77	6.11
人文地理学II	6.94	7.34
政治学	4.75	6.07
生活と経済	6.40	5.88
生物学概論II	6.52	6.15
西洋文化論	7.00	7.29
地球の科学	7.43	7.44
東西文化交流史	7.19	7.59
日本近現代文学	6.86	7.03
日本近代精神	6.42	4.95
日本史	6.97	6.85
認知 認知心理学(※)	—	6.88
人と自然と数学β	5.24	3.58
人と自然と物理学	4.34	5.46
文芸創作論	5.19	4.91
ラテン語	6.95	6.79

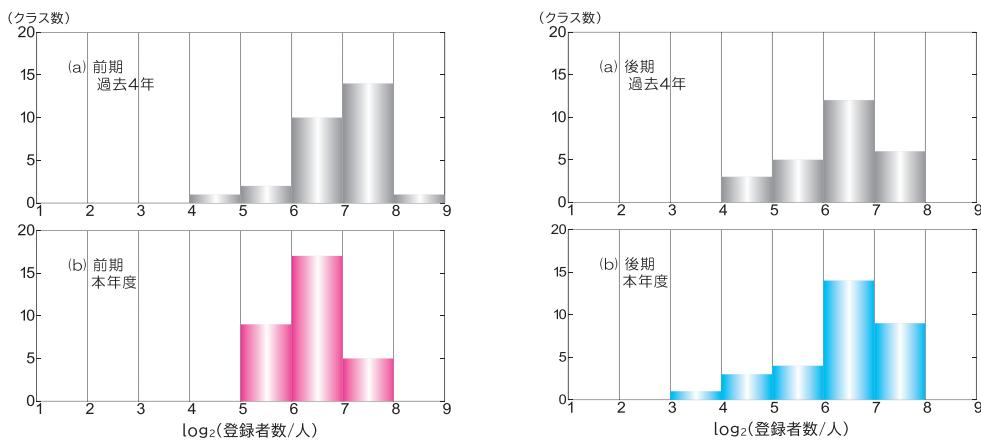
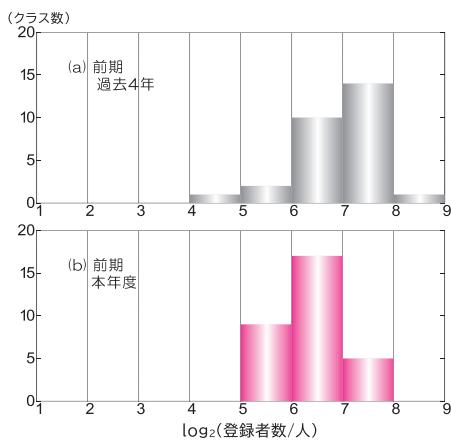


図2. 受講登録者数ポイントの度数(クラス数)分布。(a): 前期科目(左側)と(b):後期科目(右側)  
それぞれについて、上段に過去4年間の平均に対する分布、下段に本年度の分布を示している。

以上の大枠を把握した上で、各科目の履修者数の変化を観ておこう。前回までに、科目毎の受講登録者数を歴年追跡したグラフを示してきた。前期・後期それぞれ特徴的な変動パターンを示す過渡状態を経て人数分布が落ち着く様子がわかって一段落したところだったが、コロナ禍インパクトの勃発によって、原点リセットの機が与えられた。そこで今回は、今年度実際に開講された科目についての登録者数を表にして、過去4年分の平均人数と比較する形で掲載する(表1)。人数は、(従来と同形式のグラフ表示をリブートすることも念頭に置き)2を底とする対数値のポイントで表した。さらにIR的視点で、各講義の履修者数が分布する様子を把握すべく、表1のポイントをヒストグラムの形で表してみると、図2(a),(b)のようになる。同図の縦軸値は横軸人数区間に応する講義クラスの数である。前期科目の(a)を見ると、当然の成り行きとして、昨年度まで大人数側にあった分布が無くなり、中程度( $\sim 2^6$ 人)に集中する形を呈している。対して、後期の(b)は、例年に比べ大人数のクラスが顕著に増えた分布になっている。前期に受講希望が叶わなかった学生の後期の動きとして素直に理解できる。

こうした今年度の受講者数とクラス人数の分布を総合的に眺めると、一つの問い合わせがもたげてくる。今回前期の人数圧縮は、確かに学生の希望を損ねるものだったが、一方で、前期に多く存在していた巨大人数の教室クラスが無くなり、従前指摘していた前期側に総数が偏る傾向も(強制的とはいえ)ほぼ解消されたとの見方ができる。私は、かねてより、十分な教育的フィードバックを実現するには、クラス人数は $2^6$ (64)を大きく越えないことが望ましいと考えている。今回、期せずして、人数分布を理想に近づける実験が為されたわけだが、実際に担当された各位はどのように受け止められたかに关心が向く。もちろん、今回の事態では、突然のオンライン授業対策が難題そのものであったから、クラス人数の問題につなげる議論は馴染まないと承知しているが、今後、各授業におけるフィードバック充実等を検討するときの再参考材料になると思う。担当各位から意見をいただき意見を交わす機会をもてればよいと考えるところである。



## 2. オンライン授業を受講した学生の声

今回の非常事態に応じ、3大学がとった授業体制の方針は少しずつ異なり、また、前期と後期で扱いに変化があった。そうした中で、先述のとおり当共同化教養科目は、一貫して‘オンライン’方式で実施された。その際、3大学が導入している遠隔教育用のシステムに違いがあるため、講義担当者と受講者の所属が異なるケースに対応するための苦労や混乱が多々あったことを聞いている。残念ながら、当方としては、そうした運営技術面に関する知識を十分得ていないので、ここでは分析・コメントを控え、尽力いただいた関係各位に対し感謝の意を表すことにとどめたい。ここでは以下、オンライン授業の実施について、各大学が学生に対し実施したアンケートの回答等を閲覧して、気づいたこと、考えること等をメモ風に記述する。

### (a) 回線等の環境

スマートフォンの所有が当たり前の時代・世代ということで、インターネットが使えないとした学生は当初よりいなかった。ただし、スマホのデータ通信とは別の常時接続環境が無いとした1年次生は、前期には約3割とする調査例があったが、後期登録時の正式調査では14%程度に減っていた。都合のよいときにファイルをダウン・アップロードすればよい‘オンデマンド’方式ならば、一時的な有償接続やフリースポットサービスでも対応可能だが、動画によるライブ形式の講義を受ける場合には高速の常時接続が要件になり、深刻な問題となり得る。そこで実際の学生の声(ただし届いた範囲)を探ってみると、通信に由来する不満は意外ほど少なかった。この背景には次のことがあるようだ。前期から後期に向け、多くの教員がTVミーティングシステムによるライブ形式に舵を切る中、徐々にシステムの機能にも精通して、ライブの記録ビデオをオンデマンドでも提供する方式が標準化した。一方、学生の側も、現実的な危機感に促され、ネット通信環境の整備(居住場所選定を含む)を進めたことが窺える。首尾よく実施された本年のオンライン授業は、こうした教員・学生双方の動きの上に成り立った、きわどくも絶妙の結果だったと言える。

### (b) オンライン講義の内容に対する意見

肝心なのは、オンライン方式の教育内容に対する学生の受け止め方である。まず目につく意見は、丁寧な解説を伴わない資料・課題コンテンツに対する苦言である。文章ベースの解説をつくることの大変さは、今回、教員は皆痛感したと思うが、それは、話し言葉による説明がそこそこ‘いい加減’で済むことの裏返しでもある。公表可能グレードのオリジナル解説をつくり上げたならば、それは、対面授業に戻った後にも大いに活けるはずである。ご担当者諸氏には、是非、今後も継続的に‘読める’説明文書の整備を進めていただくのがよいと思う。

また、「課題が多くすぎる」旨のクレームを（教養科目外を含めた様々な場面・ルートで）非常に多く聞いた。「一つもない週と多数の週のムラがあるから教員間で調整せよ」という訴えもあった。これらに対して思うことはやや複雑である。教員側が、反応の見えない学生に対し、学習を確認すべく何かの提出を求めるのは自然なことだろうし、授業時間外の学習は本来必須であるから、毎週受講科目的数だけ課題があって然るべきとも言える。それが、是正すべき問題のようになってしまるのは、大学を、生涯最も勉強に専念する場や時期と思わなくてもよいとする、昨今の日本特有に醸成されてしまった嘆かわしい感覚に根ざしているとすれば、我々は胸を張って突っぱねればいい。しかし、「提出に対するフィードバックがない」とする苦言も少なからず見られ、説明用コンテンツの準備不足を課題で穴埋めしている側面があつたかも知れないとの自省ももたげてくる。私の経験で述べるならば、日頃の理解度チェックには、フォーラムのディスカッションが好適に使える。先行提出された他者の書き込みが見えるので、筆記試験のように扱えないが、問いかける題材を工夫して、学生どうしの意見交換に導くことができる。議論的な書き込みに正当な評点を与えることに無理はない。また、教員も議論に加わりながらときどきアドバイスする方式ならば、労力を節約してフィードバックが達成できる。対し、レポートにコメントを付ける方式は、受講者が多くなれば限度を越える苦行になってしまう。

最後に触れるべきは、主にオンライン上の相談を通して少しずつ伝わってくる「友人をつくって情報交換等したいがそれが叶わない」旨の声であ

る。これは、本年度入学生が抱える（心理側面にもかかる）最も重大な問題だ。軽々に論じることはできないが、ライブ形式の講義の中で、学生の自己紹介や意見交換をとおして個々の発言を促すことが一定の効果を与えた感触はある。ただし、自ら声を出してアピールすることが苦手な学生が確かにいて、オンラインの方式上、そこに手を差し伸べる手立てはなかなか見つからない。本年度の学生の就学状況については、単位取得の成否だけでなく、オンライン上の参加状況を調べ、必要に応じて、次年度なるべく早期に、個別面談による再履指導などを行うことが必要だろう。

## むすびのひとこと

大それた事でなくても、壁を乗り越えるように理解が進むときには、①素地としての思考力、②広範に渡りかつ最低一領域は深くに及ぶ知識、③離れた事物の関係に気付く発想力 のどれもが必要だ。大学の教養と基礎系科目の教育は、このうち②の後半以外の獲得を支える根幹の役目を担っている。一が、昨今の時流・外圧・内圧の中で、大学教育におけるこれら3項目内訳のバランスが保てなくなってきたのではないか一と沈痛になりかけていた私の気分は、本期のオンライン授業中の学生の反応のおかげでかなり立ち直った。少なくとも私が接した新入生は、文・理を横断する基盤的思考力の意義を認識し、それを獲得する心構えを有していることを実感した。「学生は、即効的に分かり、効用が見えることを求める」などの説に惑わされる必要はなかったのだ。将来の真の難問に立ち向かう叡智を生む土壤はちゃんとある。非即効的な真の思考力の育成に対して及び腰になるようなことは、ゆめゆめあってはならない。オンラインコンテンツの準備の狭間に胸中巡ったことである。

### (3) 令和2年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して

京都三大学教養教育研究・推進機構リベラルアーツセンター長／京都府立大学 教授  
岡本 隆司

本年度は文科省事業後の独自運営になってから4年目にあたり、原則として、第三年度の昨年度に達成した成果を継続維持してゆく方針であった。ところが、昨年度末より本格化してきたいわゆるコロナ禍の影響で、当初よりその活動は多大な影響を被らざるをえなかった。

- 1) 令和2年度のカリキュラム構成（科目）の考え方
- 2) 学生交流事業の企画
- 3) 今後の展望

#### 1) 2年度のカリキュラム構成（科目）の考え方

令和2年度は合計81の共同化科目を用意して、十分な種類と数の授業を提供できたと考えている。

全体のカリキュラムも、昨年度までの成果に準拠して、人文・社会・自然諸分野の学術を俯瞰し、その基礎を学習するとともに、世界の多様性を感じ、日常社会に生じる問題の真理を探求する議論ができるような学生を育成する考え方にもとづいて構成しており、当面は所期の目標にかなう現状である。

もとより学生のニーズ・社会の要請に応じて、科目の内容・構成に改編・洗練を加えていくことは不可避である。他方、担当人員・配当予算などの制約によって、休止・廃止を考慮せざるをえない科目もある。

以上の科目数の維持や担当のあり方などについては、昨年度までのリベラルアーツセンターでの協議を経て、従来の原則などを尊重しつつ、柔軟に対応してゆく方針を確認してきた。

しかしながら、すでに言及のあるように、新型コロナウィルス感染拡大・緊急事態宣言発令によ

る年度初めの授業の休止、およびその後の授業オンライン化の対応に追われて、今年度は既存授業の運営で精一杯であった。カリキュラム全体をみわたしたうえでの科目の検討・見直しなどは、とうてい手の回らない情況が続いている、現在に至っている。

それでも、たとえば今年度より開講した「京都の文化と文化財」では、オンライン方式に対応して、今日庵（裏千家）資料館長・金剛流家元・清水焼窯元清水六兵衛氏など、関連各界から著名なゲストスピーカーをお招きして、Zoomによるライブ授業を実施することができた。また産経新聞からの寄付講座として企画された「SDGsを学ぶ」も今年度から開講し、各企業・団体・自治体などから講師をお招きして、SDGsに関する多様な取り組みを講義していただいた。その詳細は別に、前田工織大副学長の寄稿があるので、参照されたい。

ともかく困難な情況のなか、関係各位のご助力で、何とか新科目の開講ができたことに安堵している次第である。

コロナ禍の収束はなお不透明である以上、授業形態の再考もふくめたカリキュラム構成の再検討にも取り組む必要性が出てくるだろう。あらためてリベラルアーツセンターの役割もみなおしていかねばならない。

#### 2) 学生交流事業

リベラルアーツセンターは例年、三大学の事業として、学生の自主的な交流事業の推進を積極的にバックアップしてきた。一昨年まで続けてきた合宿研修、そして昨年度の三大学学生交流会結成と交流集会開催は、本欄でも特筆してきたところである。

とくに昨年度は、事業全体をリニューアルし、学生によるFDともいべき交流集会を試みるなど、ようやく学生主体の活動が緒についたところだった。その成功に力をえた学生交流会は、コンソーシアムでのプレゼンやSNSによる学生向け発信など、具体的な事業計画の立案を続け、今年度にむけ、いつそう積極的な活動を期していたのである。

ところが、このように学生交流会があたためていたイベントも、コロナ禍でいっさい休止のやむなきにいたっている。せっかく意欲的な学生諸君が集まってくれて、今年度以降の展開に期待が高まっていただけに残念であり、痛恨の思いを禁じ得ない。

リモート・オンデマンドなどで、授業を成立させるだけで手一杯の現状では、いわば課外活動、しかも学生が集まるなどを前提にした学生交流事業などは、とても手がつけられない。コロナ禍の収束の見通しがつくまでは、身動きがとれない学生交流事業ながら、リベラルアーツセンターとしては、来たるべき原状復帰のあにつきに、学生の主体的積極的な取り組みが、なるべくスムーズに復活できるような態勢づくりを考えてゆくほかないだろう。

### 3) 今後の展望

今年度はいわゆる「ウィズコロナ」のなか、三大学機構すべてが大きな試練に遭って、試行錯誤した一年であった。現行カリキュラムの授業実施は、なお少なからず課題は残しながらも、一年の経験でどうにか見通しがついた。しかし今なお学生が普通どおり通学しての原状回復は望むべくもない。

それならリベラルアーツセンターとしても、い

わゆる「ウィズコロナ」の情況を前提に、専門教育の前提かつ背景をなし、全人的な素養をささえリベラルアーツの理念に即した科目的検討・再編、そして学生育成の方策を提案してゆく任務にたちかえらねばならない。

そのため具体的にどのような対策・企画が考えられるのか。授業に関しては、担当者会議の復活やFDなど意見聴取の新たなあり方・しくみを模索する必要がある。また学生の自主的な交流活動も、「ウィズコロナ」に即した、学生に負担をかけないような形で、再構築をはかっていかねばなるまい。

あらためて関係各位のご高見・ご支援を切に求める次第である。

## (4) 令和2年度三大学教養教育共同化の取組



### 1 新型コロナウィルス感染症の感染拡大防止対策を講じた授業の概要

今年度は年度当初から、新型コロナウィルス感染症の感染拡大防止対策を講じた上での授業の実施となった。共同化科目は1講義当たりの受講人數が多いこと、三大学の学生が一堂に会して受講することなどの事情から、対面授業の実施には慎重にならざるを得ず、いかにして非対面で対面授業と同等の教育効果を得られるよう実施できるか検討を重ねる1年となった。



#### (1) 前期

##### ○授業方式検討の流れ

- ・3月31日の副学長会議において、前期2回目(4/20)もしくは3回目(4/27)までの休講を決定した。
- ・4月27日又は5月11日からの対面授業を想定し、履修定員を3分の2に削減して定員調整を行った。
- ・前期開講後、三大学がメール等で協議した結果、前期全授業を非対面授業とすることが決定された。

##### ○休講措置

- ・3回目までを休講とし、共同化科目担当教員から休講分の授業に相応する授業動画・講義資料・課題等のファイルを提出してもらい、各大学のポータルサイトで学生に提示する方法をとった。

##### ○4回目(5月11日)以降の授業

- ・工織大提供のNextCloudを利用して教員・学生との講義情報及び講義資料等の共有を図ることとした。
- ・各科目担当教員は、授業動画・講義資料等のフォルダーと、課題回収用のフォルダーを作成し、それぞれNextCloudへのアクセスのURLを取得して、指定の「講義資料等配付表」に記入し、授業の前週に機構に送付する。機構は「講義資料等配付表」をとりまとめて、各大学に送付し、各大学はポータルサイトに掲示する等の方法をとった。
- ・授業はオンデマンド方式を中心に行い、一部科目はZoom等の会議システムを利用してライブ授業を行った。

##### ○前期試験

- ・6月12日の運営委員会において、対面方式での試験は行わず、レポート課題又はオンライン試験での成績評価を行うこととなった。
- ・結果的にオンライン試験は1科目(哲学)のみ。

##### ○(2) 集中講義

- ・6月12日の運営委員会において、非対面方式で行なうことが決定された。
- ・前期授業と同様、NextCloudを利用して情報共有を行うこととした。
- ・Zoomによるライブ授業と、オンデマンド方式での授業が行われた。

##### ○(3) 後期

##### ○授業方式の決定

- ・6月12日の運営委員会において、非対面方式とすることを決定した。
- ・履修定員については、削減を行わず予定どおりの定員で調整を行うこととした。
- ・前期のNextCloudを利用した授業で生じた課題の解決・改善を目指して、8月中旬に協議を行った結果、工織大のmoodleを借用して非対面授業を行うことが決定された。

##### ○後期授業

- ・工織大提供のmoodleを利用して、授業を行うことが決定された。
- ・三大学の科目担当教員と、共同化科目を受講する可能性のある全学生にアカウントを配付し、各科目ごとに作られたmoodle上のコースに教員・学生がアクセスすることにより、情報共有を図ることになった。
- ・オンデマンド方式が中心であるが、機構でZoomのライセンス契約を行い希望する教員にアカウントを配付したため、前期よりライブ授業の割合が高くなった。
- ・リベラルアーツ・ゼミナール科目の一部では、感染防止対策を講じた上でフィールドワークを実施した。(「意外と知らない植物の世界」2回、「資料で親しむ京都学」1回)

##### ○後期試験

- ・原則レポート課題等での成績評価を行った。
- ・1科目のみ、moodleを利用したオンライン試験実施。(「京都の防災と府民」)

## 2 令和2年度の共同化科目での取組

### ○開講科目

- ・別添一覧のとおり。

### ○新規科目

- ・「京都の文化と文化財」は機構提供科目として新設し、文化財、和食、伝統文化・伝統産業の3つの分野の授業をそれぞれ京都学・歴彩館、京都府立大学、京都工芸纖維大学の教職員が担当した。授業は各分野で活躍するゲストスピーカーを招いて、Zoomによるライブ形式で行った。
- ・「SDGsをまなぶ」は産経新聞社からの寄付講座の申し出を受け、工纖大提供科目として新設され、各企業・団体・自治体等から講師を派遣願いSDGsに対する取組を講義いただいた。  
(工纖大前田副学長により後述)

### ○その他

- ・「京都の経済」は京都銀行との包括連携・協力協定を元に新設されてから4年目を迎える。昨年度からは京都銀行には3回の講義を担当いただく他、各経済団体から講師を派遣していた

だき京都の経済についての講義をお願いしている。今年度はZoomによりゲストスピーカーと代表教員（小沢教授）が連携して講義を行った。

## 3 履修登録状況

- ・別添の表のとおり。前期は対面授業を想定して履修定員を3分の2に削減して定員調整を行ったため、履修希望が叶わず登録出来なかつた学生が、主に工纖大生において多数生じたため、後期は非対面授業方式の方針を早期に決め、履修定員の削減を行わなかつた。
- ・前期と後期を合わせた通年での履修登録者数は6,955人で、前年度に比べて1,186人減少（-14.6%）した。大学別では京都工芸纖維大学が前年度1,057人減少（-25.2%）、京都府立大学が135人減少（-4.3%）、京都府立医科大学が6人増加（+0.7%）であった。
- ・通年の交流率（自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）の割合）は50.9%であり、前年度より4.2%減少しているものの50%を超える高い水準を維持している。

## 令和2年度 京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿

令和2年4月

大学名	京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会									
	担当副学長		リベラルアーツセンター		教育I Rセンター		規約第4条第2項による者			
	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
京都工芸 纖維大学	副学長 (研究科長・ 学部長)	前田 耕治	基盤科学系 教授	朝田 衛	センター長 電気電子工学系 教授	萩原 亮				
京都府立 医科大学	副学長	奥田 司	生物学 教授 教養教育部長	小野 勝彦	生命基礎 数理学 教授	長崎 生光	学生部長	橋本 直哉	看護学科長	岩脇 陽子
京都府立大学	運営委員長  副学長 (学生部長)	川勝 健志	センター長 文学部 歴史学科 教授	岡本 隆司	公共政策学部 公共政策学科 准教授	秦 正樹	教養教育 センター長	窪田 好男	教務部長	長島 啓子
京都三大学 教養教育研究 ・推進機構							京都府 公立大学法人 三大学連携担当課長	池田 英孝		

## 令和2年度 共同化科目一覧

科 目 群	科 目 名	担当教員	開講期	授業目的区分	科 目 群	科 目 名	担当教員	開講期	授業目的区分
			A	B				A	B
人間と文化(31科目)	哲 学	工・伊藤 徹	前	○ ○	人間と自然(25科目)	人と自然と数学α	工・峯 拓矢	前	○ ○ ○
	比較宗教学	工・長岡 鶴郎	前	○ ○		人と自然と数学β	工・櫻嶺 泰吉	後	○ ○
	宗教と文化	医・田中 純子	後	○ ○		人と自然と物理学	工・萩原 寛 ほか	後	○ ○
	日本史	丁・浅井 雅	後	○ ○		生物学的人間学	医・小野 遼彦 ほか	前	○ ○
	東西文化交流史	工・齊藤 茂雄	後	○ ○		科学史	工・大西 順朗	前	○ ○ ○
	アジアの歴史と文化	府・井上 直樹	後	○ ○		環境問題と持続可能な社会	工・山田 佐	前	○ ○ ○
	ヨーロッパの歴史と文化	府・柳原 和也	前	○ ○		食と健康的な科学	府・川村 伸子 ほか	前	○ ○ ○
	ラテン語	医・松本 加奈子	後	○ ○		キャンパスヘルス概論	工・荒井 宏司	前	○ ○ ○
	西洋文化論	工・山下 太郎	後	○ ○		時制生物学特論(※3回生以上(修了課程で大学院生を含む。))	医・木田 由弘	集中 夏	○ ○
	日本近現代文学	工・高木 栄	後	○ ○		エカルギー科学	工・林 康明	前	○ ○ ○
文化・芸術	西洋文學論	工・山下 大吾	前	○ ○		現代科学と倫理	府・岩崎 豊久	前	○ ○ ○
	文芸創作論	医・藤田 佳信	後	○ ○		医学概論(※2回生以上の工繩大・府大生が対象)	医・奥田 司 ほか	後(午前)	○ ○
	美と芸術	工・三木 瞳子	前	○ ○		京都の農林業	府・中村 喬子 ほか	後	○ ○
	日本近代精神史	工・伊藤 露	後	○ ○		京都の防災と府民	機・松井 京美 ほか	後	○ ○
	フランス語の文化とジャポニズム(※2回生以上)	工・吉川 順子	前(午前)	○ ○		京都の自然(注)	機・石田 昭人	前	○ ○
	映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・山口 美知代	後(午前)	○ ○		製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナール)(※リベルアーツ・ゼミナール)	機・石田 昭人	前	○ ○
	医療人類学	医・田村昌彦	後	○ ○		意外と知らない植物の世界(リベラルアーツ・ゼミナール)(※意外と知らない植物の世界)	機・松谷 茂 ほか	後	○ ○ ○
	認知心理論	医・吉川 順子	前	○ ○		レーザーで測る、創る、楽しむ(リベラルアーツ・ゼミナール)	機・播磨 弘	前	○ ○ ○
	京都の歴史 I	府・吉田 伸也	前	○ ○		合計81科目			
	京都の歴史 II	府・吉田 伸也	後	○ ○					
京都学	京都の文学 I	府・安達 敏子	前	○ ○					
	京都の文学 II	府・本井 牧子	後	○ ○					
	京の意匠	工・並木 誠士	後	○ ○ ○					
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エレノア	後	○ ○					
	難文で読み解くリベラルアーツゼミナール(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)	機・藤本 七文 ほか	後(午前)	○ ○					
	京都の文化と文化財	機・宗田 好史	後	○ ○					
	現代アート(リベラルアーツゼミナール)	機・田村 うらら	集中 夏	○ ○					
	感性の美術哲学(リベラルアーツゼミナール)	機・桑子 敏雄	集中 夏	○ ○					
	科学と思想(リベラルアーツゼミナール)(※科学と思想)	工・林 哲介	後	○ ○					
	難文で読み解くリベラルアーツゼミナール(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)(※視覚芸術)	機・藤本 七文 ほか	後(午前)	○ ○					
リベラルアーツ・ゼミナール	現代正義論(リベラルアーツゼミナール)	医・栗原 光一	後	○ ○					
	リベラルアーツ・ゼミナール	機・田村 伸也	前	○ ○ ○					
	人文地理学 I	医・古閑 大樹	前	○ ○ ○					
	人文地理学 II	医・古閑 大樹	後	○ ○ ○					
	社会学 I	府・田島 駿之	前	○ ○ ○					
	社会学 II	府・中曾 贊助	後	○ ○ ○					
	政治学	工・西村 真児	後	○ ○ ○					
	国際政治	府・依田 博	前	○ ○ ○					
	経済学入門	工・人見 光太郎	後	○ ○ ○					
	法学	工・北村 幸也	前	○ ○ ○					
人間と社会(25科目)	生活と経済	府・小川 修司	後	○ ○ ○					
	心理学	工・大曾 芳夫	前	○ ○ ○					
	発達心理学	医・小川 恵子	集中 夏	○ ○ ○					
	現代社会と心	府・石田 正浩	後	○ ○ ○					
	現代社会とジェンダー	府・中曾 成美	前	○ ○ ○					
	現代教育論	工・塙 康子	前	○ ○ ○					
	環境と法	工・須藤 守	後	○ ○ ○					
	観光学α(※2回生以上)	府・宗田 好史	前(午前)	○ ○ ○					
	SDGsをまなぶ	医・前田 純	後	○ ○ ○					
	近代京都と三大学	機・室伏 伸也	前	○ ○ ○					
京都学	京の産業技術史	工・山田 由希	前	○ ○ ○					
	現代京都論	府・大島 祥子	前	○ ○ ○					
	京都の経済	機・小澤 修司	後	○ ○ ○					
	現行社会論(リベラルアーツゼミナール)(※リベルアーツゼミナール)	機・尼玉 英明	前	○ ○ ○					
	社会科学の基礎	機・田村 伸也	後	○ ○ ○					
	会合の学び方(リベラルアーツゼミナール)	機・前田 純	後	○ ○ ○					
	会合の学び方(リベラルアーツゼミナールⅡ)	機・尼玉 英明	後	○ ○ ○					
	世界よし(リベラルアーツゼミナール)	機・櫻原 美恵	集中 夏	○ ○ ○					
	難文哲學(リベラルアーツゼミナール)(※2回生以上)(※リベルアーツゼミナール)	機・尼玉 英明	後	○ ○ ○					
	京都の自然(注)	府・中曾 成美	前	○ ○ ○					
リベラルアーツ・ゼミナール	リベラルアーツ・ゼミナール	機・櫻原 美恵	後	○ ○ ○					
	人間と自然(25科目)	機・櫻原 美恵	前	○ ○ ○					
	物理學 I	府・安田 啓介	前	○ ○ ○					
	化学概論 I	工・三木 定雄	前	○ ○ ○					
	化学概論 II	工・石川 洋一	後	○ ○ ○					
	生物学概論 I	工・延田 努	前	○ ○ ○					
	生物学概論 II	工・延田 努	後	○ ○ ○					
	生命科学講話	府・森本 麻理子	集中 夏	○ ○ ○					
	地球の科学	工・酒井 敏	後	○ ○ ○					
	合計81科目								
京都学(15科目)	(再掲)	科学と思想(リベラルアーツ・ゼミナール)(※科学と思想)	工・林 哲介	後	○ ○ ○				
	京都の歴史 I	府・中村 伸也	前	○ ○ ○					
	京都の歴史 II	府・中村 伸也	後	○ ○ ○					
	京都の文学 I	府・安達 敏子	前	○ ○ ○					
	京都の文学 II	府・本井 牧子	後	○ ○ ○					
	京の意匠	工・並木 誠士	後	○ ○ ○					
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エレノア	後	○ ○ ○					
	難文で読み解くリベラルアーツゼミナール(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)	機・藤本 七文 ほか	後(午前)	○ ○ ○					
	京都の文化と文化財	機・宗田 好史	後	○ ○ ○					
	近代京都と三大学	機・宗田 好史	前	○ ○ ○					
2回生以上向け開講(9科目)	京の産業技術史	工・山田 由希	前	○ ○ ○					
	現代京都論	府・人島 祥子	前	○ ○ ○					
	京都の経済	機・小澤 修司	後	○ ○ ○					
	京都の農林業	府・中村 伸也	後	○ ○ ○					
	京都の防災と府民	機・松井 京美 ほか	後	○ ○ ○					
	京都の自然(注)	府・平山 喜美子 ほか	前	○ ○ ○					
	(再掲)	フランス語圏の文化とジャポニズム(※2回生以上)	工・吉川 順子	前(午前)	○ ○ ○				
	映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・山口 美紀代	後(午前)	○ ○ ○					
	映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・国重 裕	前(午前)	○ ○ ○					
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口 エレノア	後	○ ○ ○					
人間と自然(25科目)	難文で読み解くリベラルアーツゼミナール(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)	機・藤本 七文 ほか	後(午前)	○ ○ ○					
	観光学α(※2回生以上)	府・宗田 好史	前(午前)	○ ○ ○					
	現行社会論(リベラルアーツゼミナール)(※リベルアーツゼミナール)	機・前田 純	後	○ ○ ○					
	現行社会論(リベラルアーツゼミナールⅡ)	機・尼玉 英明	後	○ ○ ○					
	世界よし(リベラルアーツゼミナール)	機・櫻原 美恵	集中 夏	○ ○ ○					
	難文哲學(リベラルアーツゼミナール)(※2回生以上)(※リベルアーツゼミナール)	機・尼玉 英明	後	○ ○ ○					
	生物学(リベラルアーツゼミナール)(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)	府・延田 努	前	○ ○ ○					
	生物学(リベラルアーツゼミナールⅡ)	府・延田 努	前	○ ○ ○					
	生物学(リベラルアーツゼミナール)(※2回生以上)(※日本語で書かれたリベラルアーツゼミナール)	医・奥田 司 ほか	後(午前)	○ ○ ○					
	医学概論(※2回生以上の工繩大・府大生が対象)	医・奥田 司 ほか	後(午前)	○ ○ ○					

注: 今年度開講の「京都の自然」は、内容が重複するため令和元年度まで開講の「京都の自然と森林」を履修した学生は履修することができません。

担当教員(それぞれの略称は、科目の提供大学・機関を示します。)

工: 京都工芸織維大学・府: 京都府立大学・医: 京都府立医科大学・機: 京都三大学教養教育研究・推進機構

授業目的区分(○は該当するもの、◎は特に強調するもの)

A: 人文・社会・自然の諸分野の学術体系を俯瞰しながら基礎を幅広く学習し、学術への高い関心を育てる。

B: 世界の人々の多様な生き方を感じ、人としての豊かな感性や倫理観を拡張する。

C: 日々社会に生じる種々の問題において、真理や正義を探求する議論に習熟する。

## 三大学教養教育共同化科目の履修登録者（2020年度前期）

	提供大学	開講コース	科 目 名	履修定員	履修者数				交流率	履修率
					工織大	府大	医大	合計		
1	工織大	月2	フランス語圏の文化とジャポニズム（※2回生以上）	30	14	10	0	24	41.7%	80.0%
2	府大	月2	映画で学ぶドイツ語と文化（※3回生以上）	30	9	2	0	11	81.8%	36.7%
3	府大	月2	観光学a	84	11	63	0	74	14.9%	88.1%
4	工織大	月3	哲学	106	55	40	10	105	47.6%	99.1%
5	工織大	月3	法学	61	20	27	10	57	64.9%	93.4%
6	工織大	月3	現代教育論	120	58	41	18	117	50.4%	97.5%
7	工織大	月3	京の産業技術史	-	-	0	0	0	-	-
8	工織大	月3	生物学概論I	120	27	72	20	119	77.3%	99.2%
9	工織大	月3	科学史	61	31	20	10	61	49.2%	100.0%
10	工織大	月3	環境問題と持続可能な社会	106	52	43	10	105	50.5%	99.1%
11	府大	月3	京都の歴史I	181	63	92	22	177	48.0%	97.8%
12	府大	月3	国際政治	61	11	42	7	60	30.0%	98.4%
13	府大	月3	現代京都論	120	45	60	15	120	50.0%	100.0%
14	府大	月3	物理学I	120	45	54	15	114	52.6%	95.0%
15	機構	月3	製品の機能から科学を学ぶ（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	10	10	30	100.0%	100.0%
16	工織大	月4	美と芸術	106	53	34	18	105	49.5%	99.1%
17	工織大	月4	化学概論I	61	35	25	1	61	42.6%	100.0%
18	工織大	月4	人と自然と数学a	120	74	27	8	109	32.1%	90.8%
19	工織大	月4	キャンパスヘルス概論	120	48	57	13	118	59.3%	98.3%
20	府大	月4	ヨーロッパの歴史と文化	106	38	53	13	104	49.0%	98.1%
21	府大	月4	京都の文学I	61	23	35	2	60	41.7%	98.4%
22	府大	月4	社会学I	61	23	36	1	60	40.0%	98.4%
23	府大	月4	食と健康の科学	100	38	56	6	100	44.0%	100.0%
24	医大	月4	医療人類学	61	18	12	31	61	49.2%	100.0%
25	医大	月4	人文地理学I	120	42	46	31	119	73.9%	99.2%
26	医大	月4	生物学的人間学	136	13	68	55	136	59.6%	100.0%
27	機構	月4	近代京都と三大学	60	20	33	6	59	100.0%	98.3%
28	機構	月4	現代社会に学ぶ問う力・書く力a（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	11	13	6	30	100.0%	100.0%
29	機構	月4	レーザで測る、創る、楽しむ（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	13	13	4	30	100.0%	100.0%
30	工織大	月5	比較宗教学	120	57	40	20	117	51.3%	97.5%
31	工織大	月5	西洋文学論	120	15	79	10	104	85.6%	86.7%
32	工織大	月5	心理学	106	49	35	18	102	52.0%	96.2%
33	工織大	月5	エネルギー科学	120	68	33	10	111	38.7%	92.5%
34	府大	月5	現代社会とジェンダー	120	43	60	15	118	49.2%	98.3%
35	府大	月5	現代科学と倫理	106	25	32	5	62	48.4%	58.5%
36	府大	月5	京都の自然	181	79	83	16	178	53.4%	98.3%
37	機構	月5	現代社会に学ぶ問う力・書く力b（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	10	10	30	100.0%	100.0%
38	府大	集中	生命科学講話	181	68	91	22	181	49.7%	100.0%
39	医大	集中	発達心理学	106	30	21	53	104	49.0%	98.1%
40	医大	集中	時間生物学特論（※3回生以上（修士課程大学院生を含む））	30	12	2	3	17	82.4%	56.7%
41	機構	集中	現代イスラーム世界の文化と社会（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	10	10	30	100.0%	100.0%
42	機構	集中	感性の実践哲学（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	10	10	30	100.0%	100.0%
43	機構	集中	世界はいま（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	10	10	30	100.0%	100.0%
			合 計	3,712	1,386	1,600	554	3,540	51.5%	95.4%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

### 三大学教養教育共同化科目の履修登録者（2020年度後期）

	提供 大学	開 講 コース	科 目 名	履修 定員	履修者数				交流率	履修率
					工織大	府大	医大	合計		
1	医大	月 1	医学概論（※2回生以上の工織大・府大生）	120	45	13	0	58	100.0%	48.3%
2	府大	月 2	映画で学ぶ英語と文化（※3回生以上）	30	10	17	0	27	37.0%	90.0%
3	機構	月 2	資料で親しむ京都学（リベラルアーツ・ゼミナール）（※2回生以上）	20	4	6	0	10	100.0%	50.0%
4	工織大	月 3	東西文化交流史	196	107	57	29	193	44.6%	98.5%
5	工織大	月 3	日本近現代文学	174	67	57	7	131	48.9%	75.3%
6	工織大	月 3	日本近代精神史	99	18	13	0	31	41.9%	31.3%
7	工織大	月 3	京の意匠	120	37	17	10	64	42.2%	53.3%
8	工織大	月 3	政治学	99	29	35	3	67	56.7%	67.7%
9	工織大	月 3	生物学概論Ⅱ	99	28	39	4	71	60.6%	71.7%
10	府大	月 3	京都の歴史Ⅱ	299	86	96	4	186	48.4%	62.2%
11	府大	月 3	社会学Ⅱ	174	63	99	8	170	41.8%	97.7%
12	医大	月 3	宗教と文化	99	24	15	30	69	56.5%	69.7%
13	医大	月 3	文芸創作論	120	11	15	4	30	86.7%	25.0%
14	医大	月 3	現代正義論（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	8	7	2	17	88.2%	56.7%
15	機構	月 3	京都の経済	120	81	27	9	117	100.0%	97.5%
16	機構	月 3	意外と知らない植物の世界（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	14	12	2	28	100.0%	93.3%
17	工織大	月 4	日本史	120	56	42	17	115	51.3%	95.8%
18	工織大	月 4	科学と思想（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	20	2	3	25	20.0%	83.3%
19	工織大	月 4	環境と法	99	30	25	0	55	45.5%	55.6%
20	工織大	月 4	人と自然と数学β	99	9	3	0	12	25.0%	12.1%
21	工織大	月 4	人と自然と物理学	99	39	5	0	44	11.4%	44.4%
22	府大	月 4	京都の文学Ⅱ	99	41	42	2	85	50.6%	85.9%
23	府大	月 4	現代社会と心	196	80	107	7	194	44.8%	99.0%
24	医大	月 4	ラテン語	120	41	29	41	111	63.1%	92.5%
25	医大	月 4	人文地理学Ⅱ	174	90	64	8	162	95.1%	93.1%
26	医大	月 4	認知心理学	120	58	29	31	118	73.7%	98.3%
27	機構	月 4	社会科学の学び方（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	10	9	2	21	100.0%	70.0%
28	機構	月 4	京都の防災と府民	120	71	42	1	114	100.0%	95.0%
29	工織大	月 5	西洋文化論	174	81	62	13	156	48.1%	89.7%
30	工織大	月 5	経済学入門	120	89	25	4	118	24.6%	98.3%
31	工織大	月 5	SDGs をまなぶ	99	63	27	1	91	30.8%	91.9%
32	工織大	月 5	化学概論Ⅱ	99	39	19	0	58	32.8%	58.6%
33	工織大	月 5	地球の科学	174	104	65	5	174	40.2%	100.0%
34	府大	月 5	アジアの歴史と文化	120	34	66	14	114	42.1%	95.0%
35	府大	月 5	英語で京都（※3回生以上）	30	3	0	0	3	100.0%	10.0%
36	府大	月 5	生活と経済	99	26	31	2	59	47.5%	59.6%
37	府大	月 5	京都の農林業	196	86	103	5	194	46.9%	99.0%
38	機構	月 5	京都の文化と文化財	120	44	60	11	115	100.0%	95.8%
39	機構	月 5	経営哲学（リベラルアーツ・ゼミナール）	30	6	2	0	8	100.0%	26.7%
			合 計	4,396	1,752	1,384	279	3,415	50.3%	77.7%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

# (1) 先行き不透明な状況で (科目名：文芸創作論)

京都府立医科大学 特任教授  
藤田 佳信

後期の授業はオンラインによる、とのこと。2020年度は新型コロナ禍への緊急対応で、教員・学生も、事務職員も、誰もかれも大変です。

年が明け、13回目の講義を無事終えました。引きつづき事務局の、N副課長・Y専門幹両氏の支援を受けています。主にN氏が対面で、わたしの話を聞いてくれているのです。静かな部屋で時々、「カリカリカリ カリカリカリ」と乾いた音がします。副課長さんがメモをして、必要な連絡事項などを後で、Moodleに載せてくださっていました。Moodleでの、資料配布もできる範囲でお願いしています。Zoom操作もMoodleも手探りの状況なのですが。事務局も人手不足でとても忙しく、連絡もスムーズというわけにはゆかないし。

オンラインの講義をどうするのか？パワーポイントのスライドをPDFにして、Moodleに資料を載せるのも考えました。でも受講生にすれば、画面に資料が次々と表示され、資料を目で追い読みながら解説を聞くのは、負担の大きい作業に違いありません。仮にコンテンツが分かり易く視覚化されたパワーポイントのスライドでも、紙芝居みたいな講義はダメでしょうね。結局、ライブ配信はラジオ放送をイメージしてやっています。資料ができる限り減らし、毎回、台本替わりの原稿をせっせと書いて。視覚的なスライド資料を整理し、耳で聞けるように変換して、原稿に盛り込まなければなりません。工夫のしどころ、です。

オンラインで、受講生が集中できる時間は限られています。一般に限度と言われる60分で、何ができるのか、あれこれ考えました。まずは講義全体の情報量・トピックを大幅に減らす必要があります。減らすなら、内容は単純計算で例年の3

分の2ぐらいかな、とか。講義内容を大胆に削るなら、テーマを絞り込み、授業のゴールをもっと明確にしなければ、などと。

事前に取り組む作業は用意しておきますが、授業毎の課題はなし、平常点もありません。Moodleへの投稿も自由ですから、反応がなかつたらどうするのか。不安はいっぱい、です。

資料を少なくしてアップするにしても、受講生のインターネット環境がよく分かりません。仮に、学生がパソコンやタブレット端末ではなく、スマートで受講しているとしたら、資料の活字の大きさが問題にならないのか？ 資料の保存、プリントアウトはできるのか？ あるいはまた、学生のITリテラシーの差はどうなのか？も気になります。

ライブ配信では、手元に目を落としたまま原稿を読まない、そんな心づもりでパソコン画面に向かいます。話の展開、文字でつづる順にできればと願います。でも大抵、予定通りにはいきません。いつも、原稿を見ないでしゃべることになってしまうのです。結果的に。すると自然、頭に浮かぶ即興の話が入り込み、時間配分が狂います。パワーポイントなら、スライド数で、大体の講義時間を決められますが。スライド数の増減で調整して。おしゃべりを中心になると、予定の60分をオーバーするはめになるのですね。話がフラフラしないよう事前に、頭の中で話の展開をイメージしておく、シミュレーションしておく必要がありました。

双方的なのがZoomの売りのはずですが、現実には、パソコンの分割画面で、受講生皆さんとの、一人ひとりの顔、反応を見ながらしゃべるのではありません。あちら側でカメラOFFになっ

ていれば、画面は真っ暗なのですね。某私立大の友人など、自室で独り、ひと気のない暗い画面に向かってしゃべるのだそうです。事務局の協力もなく、フリーズとか、ハード面の不具合が起きたら、どうするのでしょうか？ 講義は中断し、そのまま終わりかな？ Zoomには、「世界同時不調」なるものも起こるらしいですね。

Zoomの授業、これまでのところ事務局のサポートで、なんとかライブ配信をこなせています。ノートパソコンを前に、わたしは自分が映る画面に語りかけ、画面のあちら側では、受講生も同じわたしの映像を見ながら、声を聞いているはずです、たぶん。

実際のところ、画面のあちらに誰か、受講生、本人がいるかは分かりません。不安ですね。それで確認のため？課題がどっさり出ると、学生のストレスは増大し、苦情もあると聞きました。あるいは、誰か別人が画面の向こうにいて、課題をせつせと出していたら、どうします？ ニューヨークの某大学でそんなことがあったとか、ネットの記事で読みました。まるで怪談のような話。亡くなった学生から、レポートが送られつづけていた、というですから。死亡事故のあともずっと。

12月のはじめに、1つめの創作課題エッセイがMoodleに投稿されました。試験に替わる目標課題の1つです。科目の登録者は、30名。内25名が投稿しています。翌週フィードバックするので早速、読みました。3回読みます。1回目は一般読者として、2回目は評価のために。3回目にコメントをメモしながら。受講生が探し出したテーマは予想通り、多種多様です。興味深いエッセイがいくつもありました。どの作品もオリジナルで、けっこう読ませます。また、確かに話を聞いている痕跡も、エッセイのあちこちに見つか

ります。タイトルなしのエッセイが7点ありました。バーチャルなZoomに入室したものの、席を外していたのでしょうか？ それぞれのテーマをあらわすタイトルについては、くり返し話していますが。オリジナルな創作であるための、必要不可欠な条件なのですから。

提出されたエッセイの中に1つ、追伸があります。「講義を聞いていたつもりですが、読書感想エッセイというものをあまりつかめませんでした。もし、あまりにもかけ離れているようであれば修正する機会をいただきたいです。」良かった！ちゃんと聞いてくれています。「Kさん、大丈夫です。創作条件をすべて満たしていますし、面白いエッセイだと思いました」と、毎回そんな声掛けをしたいです。

収まらないコロナ・パンデミック、いまは誰もかれもが大変です、世界も。学生の皆さんも、オンラインで送られてくる課題を独りで黙々とこなすだけなら、日々不安が募ると思います。新型コロナ感染が拡大し、また2度目の国の緊急事態宣言も出て、孤立しやすい状況ですから。心身共に元気でめげずに、決して好奇心を失わず、ねばり強く学問に勤しんでほしいです。わたしも頑張りたいと思います。

(本年度オンライン授業では、事務局の西浦圭彦副課長・保田令子専門幹、両氏のお世話になりました。記して感謝の意を表したいと思います。)

## (2) コロナ下にいかに1回生主体の教養教育を進めるか (科目名：日本史)

京都工芸繊維大学 非常勤講師  
浅井 雅

### 1. はじめに

この授業は、筆者が本年度より前任者から引き継ぎ、担当したものである。筆者がこれまで経験してきた授業は、専門科目や教養科目であっても学科やコースに特化した科目であったが、本授業は、三大学の教養科目にあたる。したがって、1回生の受講生が大多数を占める上に、幅広い課程・学科の受講生が集まるということで、開講前は毎回の授業内容に受講生からどのような反応が返ってくるか、正直不安もあった。というのも、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、受講生100名を超える授業をオンラインで開講しなければならなかつたため、尚更のことであった。

本授業は、後学期の開講であったため、対面授業が再開された大学も見られた中、三大学教養教育共同化科目的授業は全面的にオンラインによる非対面方式で実施された。受講生は京都府立大学42名、京都府立医科大学17名、京都工芸繊維大学56名の計115名であった。うち1回生は府立大25名、府立医大17名、工纖大39名で、およそ7割を1回生が占める授業となった。2回生以上は昨年度以前も他の授業を受けるなどキャンパスに通った経験を有しているが、1回生は入学式を秋に開催した大学もあるなど、ほとんどキャンパスに通った経験がないところから授業が始まった。つまり、ほとんど学生同士の交流もなく、授業についての情報交換をする相手もいないだろうことが想定された。したがって、例年以上に質問しやすい環境に気を配った。

### 2. 講義の概要

講義は、日本史の中でも特に文化・思想を中心として時代の流れに沿って行った。古代から近代

までの広い時代を取り上げるため、できるだけ写真、図表などを提示し、理解を促すよう工夫した。また、最新の研究成果を示すように努めた。

高校で日本史を履修した者、しなかった者、留学生など多様な受講生が参加しているが、どういった層にもそれぞれの気づきがあるよう、まず現代にも通ずる文化・思想を中心に身近な話題を紹介し、そこから政治・経済等の歴史に広げていく講義を行つた。

講義は毎回Zoomを使用し、PowerPointを共有して行つたが、受講生からの要望に応じて3回目の授業以降、授業前に毎回PowerPointをPDF変換し、レジュメとしてMoodleに上げるようにした。これは、授業を受ける際に、共有がうまくいかない場合、音声のみでも授業を進めるためであり、受講生からこの資料にメモ等を記入したいという要望があったためである。

また、回線の都合等で、リアルタイムに授業を受けられない場合も考慮し、リアルタイム授業の録画データをMoodleに授業後数時間以内に上げるようにした。そして、授業中に出席を取らない代わりに、リアルタイム授業の受講後あるいは録画データ視聴後にコメントペーパーをMoodleから提出してもらうこととした。

### 3. コメントペーパーの利活用

リアルタイムの授業を受講する場合であっても、受講生側の通信量等も考慮し、受講生側はビデオをOFFにしても構わないとしたことから、結局ビデオをONにして参加する受講生は現れなかつたが、毎回のコメントペーパーでどの程度授業を聞いているかについては、ある程度把握ができた。

また、受講生側のビデオはOFFになっているので、筆者にとって授業についての反応がわかり

づらい点もあったが、コメントペーパーには毎回、「改善した方が良い点・困ったこと」を書いてもらう項目を設けたため、細かいことでも受講生から指摘があり、次の授業では改善するよう努めた。さらに、この「改善した方が良い点・困ったこと」については特に、次の授業の最初に、前回のコメントペーパーで気になった点を匿名で紹介するようにした。すると、他の受講生にも「そんなことでも言つていいのか」と思つてもらえたのか、回が進むごとにさらに忌憚のない意見を言ってもらえるようになった。そして、コメントを紹介された本人は、その回の授業のコメントペーパーでは「前回、○○のことでのコメントを書きましたが、対応くださいありがとうございます。」などと書いてくれることも多く、そのようなことから、徐々に信頼関係も築いていけたように感じている。

コメントペーパーの別の項目では、「今日の授業で、気づいたこと・学んだこと・改めて調べたいこと」や「今日の授業で良かった点」を書いてもらった。初めは、「(授業内容について) だいたい知っている内容でした。」等のコメントも見られたが、授業の早いうちに、「大学の授業である以上、教養科目であっても、そこから何か自分で考えてほしい。高校までの覚える学習、試験対策の学習とは違い、大学ではこれまで知っていること、新しく学んだことから、さらに新たなものを生み出していくのが学習であるはず。教養である以上、ある程度知っていることもあるだろうが、『知っている』『知らない』だけで終わらせないでほしい。」という話をしたこともあり、コメントの内容もその回から一気に変化が見られた。また、途中、「しようもないことばっかり書いてすみません。」というコメントも見られたが、「しようもないことなんて一つもない。一つ一つの気づきが大事だ。」という話もし、最初に比べると全体と

して字数が自然と増えていった。

以上のように、コメントペーパーは、筆者の側で理解度合い、受講生の反応を把握するだけでなく、受講生との信頼関係を築くのに役立った。

## 4. おわりに

受講生の成績評価は、この毎回のコメントペーパーの提出（授業の2/3にあたる10回分の提出を必須とした）と期末レポートで行った。期末レポートについては、「(今年度後期の) 共同化科目的成績評価については、原則、試験ではなくレポート課題等」により行う旨の通知が出たため、定期試験から変更したのであるが、他の授業も含め学生が課される期末レポートが例年より増えることも予想されたため、早めに課題を出した。このことにより、それ以降の授業を受講してもらえるかとも考えたが、「今日も授業ありがとうございます。」「次回も楽しみにしています。」等のコメントもどんどん見受けられるようになり、最後まで変わらず熱心にオンラインの受講生数やコメント提出数が変化することなく、受講してもらえた。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、例年ない授業形態を余儀なくされたが、その中でもより良い授業を実施するために協力してくれた受講生に感謝したい。最初の不安は全くと言っていいほど当たらず、Zoomの画面OFFの真っ暗な画面から毎回授業終わりに拍手してくれる受講生もあり、そのたびに授業の疲れが吹き飛んだ。今年度の受講生とは授業で直接顔を合わせることはできなかつたが、また何処かで会えたり、授業での筆者の発言により何かを学んで、それが何かに役立てばうれしい。

そして、今年度の受講生からの指摘等を、来年度以降も「日本史」の授業に活かしていきたい。

## (3) 教養としての「国政政治」とは何か

(科目名：国際政治)

京都府立大学 非常勤講師  
依田 博

### 1. ある講演主催者の付度のない言葉(?)

「教養部の先生ですか。2年間の教養課程で私が学んだことは何一つありませんでした。」交換した筆者の名刺をつくづく見て講演主催者が（これから演壇に上がる予定の）筆者に言い放った遠慮のない一言である。教養教育についてのこの感想は、今も昔多くの学生に共通のものだろう。

1980年代以降、筆者の大学も教養教育の意義や手法の検討に膨大な時間とエネルギーを費やすこととなり、その帰結が教養部もしくは教養課程の廃止もしくは解体であった。検討の過程で明らかになったことは、教養教育の意味は「学生の大学生活への社会化過程」という側面である。

### 2. 「教養」とは何か

筆者自身がたどりついた教育の対象としての「教養」とは、

- a. 専門学習の入門
- b. 専門外の知識の習得による知的地平の拡大
- c. 市民として身に着けるべき知的作法

である。

このいずれもが、学生にとっては退屈であり、かつ何の役に立つかがわからない無意味な学習だったのだろう。「専門学習の入門」は、筆者の専門である政治学といえば、高等学校で社会、歴史、地理などの授業を受けた学生にとっては、高校で習ったことと重なっているので、退屈だったに違いない。専門外の知識の習得にどうして「政治学」の学習が必要であるのかがわからない学生にとっては学習に身が入らない。ましてやすでに「市民」であるのに、そのうえで市民としての教育が必要であると思わない学生もいたはずである。動機や知的関心が一様ではない学生の教育、教養

教育の難しさは、ここにある。

しかし、こうした学生側の事情よりもはるかに筆者の頭を悩ましていたのは、具体的に何を学生に伝えるのか、そしてどのような方法で伝えるのかという問題である。筆者が担当してきた政治学や国際政治という分野の授業は100人よれば100とおりの内容と教え方がある、標準的な教え方やテキストがないといわれてきた。かくして試行錯誤の繰り返しがあった。

それでも、筆者が最も腐心したのは、社会化過程としての教養教育を意識した「市民として身に着けるべき知的作法」である。次節でこのテーマを検討してみたい。

### 3. 市民として身に着けるべき知的作法とは何か

そもそも「市民」とは誰か。ここでは、政治の領域で「自治権」を行使する存在としておこう。自治権を行使する際に求められるのは、政治の領域である限り、その結果が社会全体に及ぶことへの認識である。もちろん、フリーライドという決定の選択肢もある。どのような選択肢を選ぶにせよ、決定の結果は、政治の世界では、社会を構成するすべての人を拘束する。それだけに、決定権を行使する者にはそれにふさわしい能力や資質が求められる。

その能力・資質とは、論理的思考力、分析力、批判力、想像力、表現力、そして責任感である。いずれも大学教育で培うことができる。学生には、すべてのことを疑ってかかる慎重さ、問題の解が複数あるとの認識、解やその妥当性がわからなかつたときにはまず自分の知識を総動員し、それでも満足しなかったなら自分の外にある情報源を徹底的にしらべるという粘り強さ、解の設計において

てデータなどの確かな根拠に基づくこと、解や意見を他者に伝える文章力などの表現力を磨くことなどを求めた。

特に力を入れたのがエッセーライティングである。テーマは、授業で学習した内容とそれに関連する国際政治の出来事を題材にした。学生には課題ごとにループリックを示し、ループリックに基づいて評価し、添削して返却した。エッセーを書く際に、誰かの意見やデータを引用する場合、その引用元が確かであることを常に確認し、かつ明記をすることを要求した。その際、ウィキペディアは参考にしてもよいが、決して引用しないように釘を刺した。というのは、ウィキペディアの内容に誰が責任を持つのかが不明であり、かつその内容も誤りが多いからである。ちなみに、事典は、編集委員会のメンバーはもとより、項目ごとの執筆者が明記され、内容についての責任がはっきりしている。ネット上での "Encyclopedia" も同じである。また、データも確かなものなのか、参考にする議論の前提や論理展開に無理がないかどうかを見極めるようにアドバイスした。証明のしようのない噂や陰謀説は論外であるとし、コピペは「盗作」にあたると禁止事項にした。ライティングを通じて筆者が求めたのは、社会人としての作法の習得である。

## 4. 教養としての国際政治

多くの分野がそうであるように、政治学にもアリストテレス以来の長きにわたる蓄積があり、現代の国際政治も含めて古典や研究書は膨大な数にのぼる。また、政治がかかわる問題領域は、国内・国際も含めてきわめて多岐にわたるために、いきおい焦点を絞って授業を構成しなければならない。では、どう絞るのか。幸いにして、長い研究の蓄

積を反映して国際政治のテキストも洗練され、できるだけ新しく、国際問題を理論的に説明しているテキストを選ぶことができた。

内容的には、学生が有権者として、あるいは社会人として国際的な出来事に接するときに参考になるように、重大な時事問題（国際機関、メディア、学界で盛んに議論されている問題）を取り上げ、その問題を国際政治学での有力な理論に基づいて解説した。国連を例にとれば、国連の報告書で解決に取り組むべき重大な人類的課題として、①経済的・社会的脅威：貧困、感染症、環境悪化、②国家間紛争、③国内紛争：内戦、大量殺戮その他の大規模な残虐行為、④大量破壊兵器：核兵器、化学・生物兵器、⑤テロリズム、⑥国際的組織犯罪を挙げている (*A more secure world: Our shared responsibility Report of the High-level Panel on Threats, Challenges and Change*, 2004, p.2)。さらに、これらの問題を横軸、近代以降の世界史を縦軸として問題の構造や背景を説明した。

## 5. 現代の教養教育：むすびにかえて

ポスト真実と反知性主義の時代を迎え、教養教育は新たな課題に直面している。これまでの大学教育は、近代社会が育んできた合理主義や科学精神に基づく研究成果に依拠してきた。しかし、先の人類的課題の多くは、近代社会のこれらの知性によってもたらされたものであり、さらに深刻な度合いを加速させている側面がある。さらに、合理主義や科学は、人々をめぐる困難な状況を残酷なまで客観的に明らかにする。たとえば貧しさや生活の苦しさは、合理主義や科学の受容の失敗であり失敗の責任は本人にあるとして、人間の感情

を逆なです。むろん、セーフティネットも整えられるが、それも社会的ゆとり次第で伸縮するので、「セーフティ」というほど安定しない。合理主義や科学の恵みにあずかるのは一握りの「学力エリート」であり、セーフティネットで保護された人々である。それ以外の人々は、それに対する信頼感を持つどころか、彼らの存在の限りなく軽いこと、すなわち「承認への欲求」が満たされないがゆえに、反感すらいだく。日本では、生涯賃金を比べると、学力エリートとそうでない人との間では1億円以上の格差、つまり人生設計の可能性に大きな違いがある（労働政策研究・研修機構『ユースフル労働統計 2019』）。

加えて、現代社会が直面する諸問題に対処するための政策は、近代の合理主義や科学の素養を身に着けた者（学力エリート）たちが設計する。その政策によって状況がますます悪化すると感じる者は、政策設計者のみならず彼らがよって立つところの知識や科学に恨みを抱くに違いない。

近代社会が育んできた知性への信頼が揺らいでいる、このような時代の教養教育の意義とは何だろうか。政治学などの社会科学の最新の研究からうかがえるのは、研究者自身は、その知的関心のあくなき追及を止めることは決してないばかりか、ますます精緻なものとなっている。しかし、知的営みの成果への社会の信頼感は、ますます激しく揺らいできている。欧米や一部の国では、その揺らぎはポピュリズムや権威主義への傾斜となって現れている。日本では、その兆候は欧米ほど明確ではないものの、社会構造的には潜在化・陰湿化するであろう。社会化過程としての教養教育は、知的アノミーという新たな困難な時代を迎えていくといつてよい。

## (4) ゼミナール型授業における遠隔システムの活用方策 (科目名：社会科学の学び方)

京都三大学教養教育研究・推進機構 非常勤講師  
児玉 英明



### I ゼミナール型授業におけるコロナの影響

著者はリベラルアーツ・ゼミナールを3科目担当している。前期が「現代社会に学ぶ問う力・書く力」、後期が「社会科学の学び方」「経営哲学」である。本稿では、ゼミナール型授業における遠隔システムの活用方策について論ずる。

通常であれば、4月の履修ガイダンスにおいてリベラルアーツ・ゼミナールの特色が周知される。そこで関心を持った新入生が第1回目の授業を体験受講して、履修を決定する。しかし、2020年度はこのようなプロセスを経ることなく、遠隔授業が始まってしまったため「ゼミナール型の授業は講義型の授業とどのように違うのか」をよく理解しないまま履修登録をした学生もいた。

著者が担当するリベラルアーツ・ゼミナールでは、前期に開講した「現代社会に学ぶ問う力・書く力」を受講した学生の中から、毎年、8名程度が後期も継続して「社会科学の学び方」を受講する。前期から継続して受講する学生は「レポート執筆」や「プレゼンテーション」の作法にも習熟し、特に「グループディスカッション」ではリーダーシップを発揮してくれる。このような前期からの継続履修の学生が、後期から参加する学生をひっぱってくれるおかげで、リベラルアーツ・ゼミナールの主体的な雰囲気が保たれてきた。

ところが、2020年度に遠隔授業になってから、リーダーシップを発揮する学生がいなくなってしまった。「社会科学の学び方」(履修者21名)は、Zoomを活用して、全ての履修者が顔を出してオンラインで実施した。その中には、前期からの継続履修の学生が12名いるのだが、前期のゼミナールをオンデマンドで実施した弊害は大きく、継続履修の学生も総じて受身の姿勢であり、教室で実施するときのような活発さが見られなかった。



### II オンデマンドとオンラインのハイブリッド

シラバスの授業計画は、対面授業を前提として書かれたものである。対面授業ではうまく実施できていた教育プログラムであっても、それを遠隔システムに乗せた場合、同じように効果を上げるプログラムもあれば、効果を上げないプログラムもある。これは容易に想像がつくことなのだが、著者自身が遠隔授業に不慣れだったこと、また学生のIT環境の整備がまちまちだったこともあり、前期の授業では対応が後手に回ってしまった。

「現代社会に学ぶ問う力・書く力」では、4月、5月の前半4回は、高校レベルの「論理的な文章の書き方」に関する演習に当っている。このような演習を中心としたライティングプログラムは、受講生が都合のいい時間に聴講し、課題提出を行うオンデマンド型授業が適している。

ただし、オンデマンド型授業からは、ゼミナールの醍醐味である学生交流は生まれない。対面授業では、演習中心の回の場合でも、個別ワークの前に、三大学の学生が混在した4人グループを組み「どんなサークルに入ったか」「どんなバイトを始めたか」など、近況を報告しあう時間をとっている。しかし、オンデマンド型授業では学生交流を促す対話の積み重ねができなくなってしまった。

Zoomのブレイクアウトルーム機能は、学生交流には有益なのだが、ゼミナールを通じた継続的な人間関係には発展せず、人間関係がその都度リセットされてしまうバーチャル感がぬぐえない。

学生交流の機会も維持しつつ、リベラルアーツ・ゼミナールの授業改善を考えるならば、オンデマンドとオンラインのハイブリッドということになる。個人演習中心のプログラムはオンデマンド、三大学の学生と意見を交わすプログラムはZoomを使ったオンラインということになる。

## 第2部 共同化科目的授業研究

(4) ゼミナール型授業における遠隔システムの活用方策（科目名：社会科学の学び方）



### III 授業の細分化と個別フィードバック

リベラルアーツ・ゼミナールを遠隔で行う上で心がけた改善は、第一に授業の細分化、第二に個別フィードバックである。対面授業でも同じだが、遠隔授業になって改めてこの二点を意識した。

オンデマンド型で授業をする場合、90分授業を9つに細分化して、1ユニットを10分で完結するように収録している。収録する際は10分という限られた時間で、いかに密度を高めて、簡潔に話すかに意識が向くので、対面授業よりも隙のない授業を提供できている。遠隔授業において、学生の集中力を維持するためには、普段以上に授業を細分化し、一つひとつの部分品を積み重ねるようなつもりで全体を構成することが有効である。

遠隔授業においても、教員から指名されて発言が求められる緊張感を維持する。しかし、1クラス21名の「社会科学の学び方」では、全ての学生を時間内に指名するわけにはいかない。その代わりに、3名7グループに分けて、Zoomのブレイクアウトルーム機能でグループをつくり、グループ内で全ての学生に発言させる。この機能は、各グループを教員が巡回することも可能である。

リベラルアーツ・ゼミナールを遠隔授業で実施する際は、対面授業のとき以上に、一人ひとりに個別フィードバックする機会を増やすことである。

「社会科学の学び方」では、毎回、教科書『君たちはどう生きるか』を読ませ、自分に引き付けてながら感想文を書きためてきた。感想文にはメールで個別フィードバックを行い、グループディスカッションの中でも紹介しあってきた。授業形態が対面授業から遠隔授業に変わっても、個別フィードバックが行われ、学生同士がグループディスカッションで交流できるという参加意識が保たれれば、学生の主体的な姿勢は維持される。



### IV オンラインしゃべり場と自主ゼミナール

2019年度のリベラルアーツ・ゼミナールの受講生に協力いただき、4月から7月の毎日18時から18時45分に「オンラインしゃべり場 喫茶児玉」を開催した。新入生の孤立を防止するために、会議アプリ（Vidyo）を使って、お互いに顔を合わせておしゃべりをしようという企画である。オンラインしゃべり場の開催には、オンデマンド授業で学生交流が不可能な現状を補う狙いもあった。

「喫茶児玉」を開けても、全く客が来ない日もあるが、予期せぬ話で盛り上がる日もある。京都府立医科大学の学生と「釣り」の話で盛り上がり、京都府立大学の学生の「遠隔授業に関する嘆き」をみんなで聞いたりした回が印象的だった。

オンラインしゃべり場では大学別、学科別の情報交換会も実施した。特に、看護学科の2回生が協力してくれた学習相談会は盛況だった。遠隔授業では把握しにくい看護学科の学びについて、2回生が1回生の質問に丁寧に答えてくれた。

Zoomが普及したことで、場所にとらわれることなく、自主ゼミナールの開講も容易になった。2020年度は、2019年度の「経営哲学」ゼミナールの受講生が中心になって、毎週水曜日の19時から19時45分に、経営学の自主ゼミナールを開講している。『現代経営学入門』を精読したり、就職活動の準備となる新聞記事の紹介を行ったりしている。応用化学科の学生4人が参加するLINEグループを立ち上げ、各自が切り抜いた化学産業に関する新聞記事を、LINE上で共有している。

三大学の学生を横につなぐリベラルアーツ・ゼミナールは、京都三大学教養教育研究・推進機構の象徴的な取組である。コロナの制約はあれども、今できることを積み重ね、引き続き三大学の教養教育と学生交流を促進していきたい。

# (5) 三大学共同化科目「世界はいま」を担当して (科目名：世界はいま)

京都三大学教養教育研究・推進機構 非常勤講師 / NHK 国際放送局ワールドニュース部 エグゼクティブディレクター  
**榎原 美樹**



## 1. 実施概要

京都三大学教養教育研究・推進機構から、夏季講座として連続講義を行う旨の依頼を受け、2020年8月27-28日の2日間で、あわせて8コマの講義を行いました。コロナ禍が続く中、対面ではなくオンラインでの講義となり、受講者は三大学あわせて25名でした。

講義の内容は「世界はいま」という主題で、副題を「グローバル VS ローカル」とし、グローバル化が叫ばれてきた時代に、改めてグローバルとは何を意味し、いかにとらえるべきなのか、そしてグローバルと対局のコンセプトとして見られるローカルとは？を考えるところを端緒とし、講義を通して、各学生が、京都（ローカル）から世界（グローバル）へつながる行動を実現することは可能かをグループで討論し、発表するという形式をとりました。



## 2. オンライン講義のメリットとデメリット

3つの異なる大学の、名前や顔を知らない学生たちを相手にオンラインで講義をすることとなり、果たして一日4コマ、2日間という長時間にわたり、集中力が持続するのか、少し不安があったことは確かです。そのため、できるだけ視覚と聴覚に訴える講義内容にする工夫と、さらにはコマごとに講義形式を変えること、その中に学生同士のディスカッションを取り入れ、各自に役割を与えて発表まで行きついてもらう、能動的な参加を促す形を取り入れました。オンライン会議ツールのZOOMはブレイクアウトセッション（いわゆる分科会のようなもの）が可能であり、それぞれの部屋で参加者が文書や図なども共有できたため、

どの部屋も活発な討論が展開しました。

オンライン授業のメリットは、受講者一人ひとりの顔が見え、双方向のコミュニケーションがとれるため、大講堂で講師が話をし、受講者はそれをじっと聞くという形よりも、講師と受講者の双方向の質疑応答が行い易い雰囲気があり、受講者が眠ることも不可能な、ある意味緊張感をもって講義ができるという利点があると感じました。またオンラインコミュニケーションに慣れているいまの学生たちも、講師との会話が、むしろ画面を通したほうが容易だと感じているかに見受けられたほどです。

デメリットとしては、特に今回のような連続講義の場合、視覚に訴えるパワーポイントなどをより多く作る必要があるように感じ、準備に時間がかかると感じたこと。そして、当然ながら同じ空間と時間を共有することによって、生身の人間同士のコミュニケーションの中で感じ取ってもらえること、たとえば行間を読んでもらうことや、討論の中で体感として得る共感などが欠ける感じがすることでした。



## 3. 「世界はいま」の講義内容

2日連続の講義は、第1日目の1枠目は大学の研究者ではなく、報道記者としての実務を経験してきた私の経歴を理解してもらうことによって、なぜ“グローバル”と“ローカル”への思考が重要であるのかを考えて頂くことにしました。

私はほぼ30年近く、NHKの海外ニュースを取り材し、原稿を書き、あるいはリポートをしたり、番組を作る仕事を行ってきたので、いわゆるグローバルな事象を、日本に伝える仕事に携わってきました。2013年からは発信のベクトルが真逆となり、東京から日本やアジアのニュースを中心に、

## 第2部 共同化科目的授業研究

### (5) 三大学共同化科目「世界はいま」を担当して（科目名：世界はいま）

世界160か国へ英語で24時間発信する国際放送を担当しています。実はニュースの取材は、対象が国際的な事象であっても、発信源の現場にいると言う意味では、常にローカルです。しかし、そのローカルで起きていることが、世界にとってどのような意味があるのか、またはグローバルな歴史の中でどのような位置づけであるのか、または位置づけになりそうなのかなどを短い時間で見極め、瞬時に発信することを求められる仕事でもあり、多角的な視点から個々の事象を検証することが重要だという話から、講義を始めました。



(PP例：南米チリ地震を報告する筆者 2010年)

今回の講義の大きな目的は、“グローバル”的概念について学生が考えを巡らせること、そしてグローバルなものとは決して自分と関係のない遠いところのものではない、ということを掴んでもらいたいというものでした。それをまさに体感できるのが今全世界を震撼させている新型コロナウィルスの感染拡大であり、その意味ではこれ以上ない好機だったことは確かです。

2枠目からは疫病との闘いを続けてきた人類の歴史を振り返ったあと、世界各地で見られるリーダーシップとコロナ対策の成否の関連性、アメリカ・ブラジル・日本・台湾でとられる対策の違いや、コロナ禍の中での政治・社会的対立などにつ

いての分析や比較、展望について話し合いました。



(PP例：アメリカで起きた感染症対策への反発)

2日目の4枠では、京都に住む学生自身が今、ローカルで人々が困っている事象があるとすれば、それをどのように解決することができるかについて考えよう、というテーマを追ってもらいました。コロナ禍による経済への影響により、アルバイトがなくなっている、閉店に追い込まれている商店がある、仕送りが止まった友人がいる、といった身近な問題や、海外から来た技能実習生が困窮を極めている、地域の病院が医療崩壊寸前に追い込まれている、あるいは、どの情報を信じてよいのかわからないと言った情報リテラシーの問題まで、身の回りで起きている様々な問題があがり、それらをどう解決してゆくべきかについて、5つのグループにわかつて討論を行ってもらい、解決策を探り、最終的に発表をしてもらいました。

学生たちの議論は非常に活発で、中には今からでも実施していくような具体的な解決策をあげたグループもありました。最終リポートの中に、「自分のローカルに誇りをもってグローバルに生きていけるような人になりたい。」との学生の言葉があり、今回の連続講義で何かを得てくれたのであれば、参加させていただいた意義があったと思いました。

## (6) 「SDGs をまなぶ」の実施報告 (科目名:SDGs をまなぶ)

京都工芸繊維大学 工芸科学部長

**前田 耕治**

京都工芸繊維大学 基盤科学系 教授

**秋富 克哉**

京都工芸繊維大学 基盤科学系 教授

**人見 光太郎**

京都工芸繊維大学 非常勤講師

**筒井 洋一**

「SDGs をまなぶ」は、三大学教養共同化科目のひとつとして、2020年度に初めて開講した。毎回の受講者数は70人超であった。SDGs自身が17課題169目標を抱える包括的プログラムであり、国、自治体、企業、各種団体、個人を実践主体とするため、その全貌を理解するために、幅広い実践例を聴講したうえでグループワークを主体的に行うというカリキュラムを構成した。末尾の講義リストに示したように、各界から幅広い実践例を学ぶことができた。授業の目的として下記の7つを掲げた。

1) SDGsの理念および17の目標について理解を深める。2) 17の目標の相互連関と現実社会の変革の可能性・困難さについて考察する。3) 諸団体がどのようにSDGsをとらえ、実践しているかを理解する。4) 諸団体の取り組みについて批判的に考察し、また提案を試みる。5) 学生自身としてのSDGsの捉え方、実践について考察する。6) 学生自身の今後のキャリアとSDGsの関係について考察する。7) 学生どうしのグループワークを通じて、SDGsの実践モデルを作成する。

講義はすべてオンラインで実施した。完全なオンデマンド配信となった京都市の授業を除いて、すべての講義では、ライブによる講師の肉声を聞きながら活発な質疑応答が交わされた。京都生協の講義ビデオはオンデマンドで配信され、学生は予習したうえで当日の質疑だけライブで参加するという変則的な形態であったが、学生はよく予習をしていて、40分間の質疑時間はあっという間に過ぎた。学生は、毎回の授業が終わるたびに講師に対して質問・感想文を提出した。講師からはフィードバックや優秀回答者の選抜を行ってもらい、優秀者には成績に加点した。また、4週分の講義を受けてレポートを提出してもらい、担当教員が採点した。レポートでは、講義の要約だけではなく、自分の意見、疑問、提案などの記述を重視した。以上を総覧すると、回を追うごとに、学生のSDGsに対する理解は深まり、上記に示した授業の目的に接近していることが感じられた。

最終成績は、質問・感想文による平常点を30%、3回のレポート点を60%、グループワークを10%として評価した。

第13週から第15週までの3回の授業では、集大成としてのグループワークを行った。以下は、グループワークを担当した筒井講師からの報告である。

私は、第13回から第15回を担当した。毎回の授業を受講生が振り返り、受講生同士で共有し、自分の関心の強い回を選択した。それを来年度の受講生に向けて、1~3分間の動画と2000字程度の文章で説明し、Webサイトに掲載した。著作権を遵守することと来年度の受講生を想定して作品を作ることとした。作品は以下のサイトに公開されている。

<https://learning-sdgs.wixsite.com/home>

第13回は、三大学の受講生70~80名が参加していたが、異なる大学の大学生など知らない学生との交流をオンラインでおこなった。Zoomのブレイクアウトセッションで、1ルーム5, 6名で自己紹介、大学の自慢などについて話し合った。授業の最後に、録画が視聴可能な9授業中、自分がもっとも好きな回の希望を出してもらい、次回からは、それに基づいて、グループワークをした。

第14回は、希望を元に、9グループ(1グループあたり約10名で、三大学混合メンバー)に分かれ、1~3分動画・2000字のメッセージ作成について話し合い、第15回で発表した。授業終了後には、期限通り全グループが動画と文章を提出した。

第15回は、9ルームに分かれ、グループの半数のメンバーが前半の発表を担当し、残りの半数は別ルームで発表を聞き、後半は交代した。

成績については、1) 授業終了後に毎回の振り返り、2) グループ内での相互評価、3) 自己評価を積算した。相互評価は、5項目についてグループ内の他のメンバーを評価しあうことでグループへの貢献を評価した。

以上のように、オンライン授業では、グループ

ワークの実施や、グループワークの評価が難しいという声があるなかで、いずれにも対応可能な新しいオンライン授業の実例を提示した。

上記の作製動画は、受講した講義の中から一つを選んで、紹介メッセージやSDGsの解説を来年度の1回生に送るという趣旨で作られた。いずれも、講師の単なる受け売りではなく、学生たちが話し合って一致した重要なメッセージが、レベルの高いプレゼンテーション技術とともに散りばめられている。この動画メッセージは、まさにSDGsの17番目の課題である、あらゆる国、地域、個人をつなぐパートナーシップを体現しているといえる。この動画が次年度の受講生に対する本講義のいざないになることは間違いない、持続可能なFD活動となることを願いたい。

#### ～講義の題目と講師～

1. SDGsの概要と授業の目的（担当教員によるガイダンス）
2. SDGsをまなぶ～金融機関の果たすべき役割～（野村ホールディングス株式会社）
3. JTグループのサステナビリティ戦略とSDGsへの貢献（日本たばこ産業株式会社）
4. SDGsとESGのつながりを知り、ビジネスでSDGsに貢献することの意味を理解しよう（株式会社日本総合研究所）
5. ポスト・コロナ社会におけるレジリエンス・SDGsの推進（京都市）
6. SDGsに掲げられる平等な社会と、オンラインゲームの持つ可能性（レノボ・ジャパン合同会社）
7. 信頼で世界をつなぐ～JICAの国際協力とSDGs達成に向けた取組み～（JICA関西センター）
8. 我が国におけるSDGsの取組と展望（外務省地球規模課題総括課）
9. 社会課題を克服する未来のまちづくり「スーパーシティ」（参議院議員 片山さつき氏）
10. 世界が学びたい「日本の高齢者福祉」、日本

が学ぶべき「フィンランドの女性活躍と幼児教育」（社会福祉法人 隆生福祉会）

11. SDGsと私たち（株式会社パソナグループ）、SDGsと持続可能性の本質（株式会社パソナ農援隊）
12. 生活協同組合（コープ）とSDGs～たすけあいの理念をいかして、だれ一人取り残さない社会を～（京都生活協同組合）

#### ＜参考資料＞

～グループワークでの学生のメッセージ（抜粋）の紹介～

##### 1. サステナビリティ戦略（JT）

今までJTグループがどのような事業を展開しているのかほとんど知りませんでしたが、慈善事業ではなく本業を通じてSDGs達成に向けた取り組みを行うという考え方が今までしくは他の企業とは違う考え方で斬新かつ画期的であり、これから企業のあり方であると思いました。

##### 2. 企業にとってのESG投資のメリットとは？（日本総研）

経営者になる人もそうでない人も今後このような一見単独で存在しているものを繋げ、結び付ける意識をすることで人として多利益な人材となり必ず重宝されるため、この講義の主題であるESGについて理解を深めた方がいいと思われる。

##### 3. レジリエンス（京都市）

これからの社会では、今までの経済成長至上主義による「成長社会」を脱却し、「定常型社会」への挑戦が待ち受けている。かつて誰もが経験したことのない状況に、私たちはどのようにして向き合っていけばいいのでしょうか。今後の社会の変革に向けて、人が育ち、学ぶ仕組みを構築する必要があるといえます。人が生涯育ち、学び続ける社会こそが「レジリエンス」のある社会だと定義できるでしょう。

##### 4. Global company to SDGs（レノボ・ジャパン）

レノボは電子機器の会社であるという特性を生かし、今までの教育よりも専門性の高い教育を受ける機会を提供している。これは、SDGs の目標4「質の高い教育をみんなに」に関連する。現代社会には SDGs の17の目標以外にも様々な課題が山積している。Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics の5領域の力を養い、AI にはできないような独創性あふれる思考ができるかどうかが持続可能な社会をつくるにあたって大きなカギとなるだろう。

#### 5. 信頼で世界をつなぐ（JICA 関西センター）

ところで「アラブの春」をご存知でしょうか。このような事件を防ぐには経済だけでなく、様々な視点で国を見ることが重要です。そして、そのためにはコミュニケーション力が必要だと JICAの方はおっしゃります。ここで言うコミュニケーション力とは現地の文化を理解する力、現場の匂いを肌で感じる力、人々と同じ目線で共感する力です。このように「相手を理解しようとする力」が国際協力には必要なのです。

#### 6. 我が国における取り組み（外務省）

SDGs は大きな目標を掲げ、政府や地方自治体、様々な団体が目標達成のために活動しています。しかし、それに加えて私たち個人の行動も、目標達成のためにとても重要です。具体的な方法としてまず、SDGs を知ることが挙げられます。大学の授業で SDGs について学んだり、イベントに参加してみたり、ニュースや書籍で調べてみたりするなど、方法は様々です。「外務省 × SDGs」という外務省公式の Twitter アカウントもあります。次に、自分にできることを考えてみましょう。個人としてでも、サークルなどの団体や職業を通してでも、SDGs につながることを考えてみましょう。そして、最後にできることからやってみましょう。

#### 7. スーパーシティとは（片山さつき参議院議員）

この「SDGs を学ぶ」の講義は SDGs に関連した様々な社会問題をテーマとしています。そのため、文系、理系関係なく自分の興味にあったテーマを必ず見つけることができます。また、この

講義では、SDGs に関連した様々な社会問題に対して最前線で取り組んでいる現場の人たちの貴重な意見を聞くことができます。片山さつきさんは現役で国会議員として働かれている方で、地方創生大臣やまち・ひと・しごと創生大臣などの国のトップの役職を歴任されてきました。普段の大学の講義では話を聞くことができないような豪華なゲストの貴重な話を聞くことができる機会を得ることができます。

#### 8. 日本の高齢者福祉（隆生福祉会）

フィンランドの女性活躍のお話を聞き、日本の女性が社会に進出していく大切さを学びました。フィンランドには政治や企業、様々な方面で活躍される女性が数多くいます。その理由は、働く母親を基準に設計された社会制度で女性が働きやすい環境が整えられているからです。これに対し日本は、男女平等に関する国際ランキング 153 国中 121 位という不名誉な結果があります。ジェンダー平等とは、すべての人が自分の能力を最大限に発揮できるチャンスを得られるようにすることだと学びました。日本が今後より良い国になるかどうかは女性の活躍にかかっています。

#### 9. 助け合いの理念を生かして（京都生協）

今年度の受講者がこの回で特に印象に残ったことを来年度の受講者に伝えるために、このグループ全員で出し合った生協の授業の感想からそれぞれ要素を取り出していった。「エシカル消費」が8人とグループ内のほぼ全員が言及していた。その次は「SDGs 採択前という、早期から存在する持続可能な概念とそれに対する取り組み」「『一人は万人のために、万人は一人のために』などの生協独自の理念」。その次に多かったのは2要素同率2人の「生協という言葉の持つ意味」と「せいきょう牛乳」だった。以上の結果から、この講義で一番今年度受講者の記憶に焼きつかれ、一番来年度の受講者に学んでほしいと我々が勧めるのはやはり「エシカル消費」だ。

## 会議の審議状況

### □ 副学長会議 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和2年5月29日（金） 午後2時30分～午後4時00分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和2年度の運営体制について (2) 令和2年度の予算・事業計画等について (3) 令和2年度前期 教養教育共同化授業の履修登録者について (4) 三大学教養教育共同化 意見交換会について (5) 三大学教養教育共同化 学生交流会について (6) 令和3年度学年暦（案）について (7) 新型コロナウィルス感染症対策等について
令和2年10月20日（火） 午後2時40分～午後3時40分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 211 講義室	【協議・報告等】 (1) 令和3年度 Moodle 提供の京都工芸繊維大学への要請について (2) 令和3年度学年暦（案）について (3) 令和3年度事業計画（案）について (4) 令和3年度予算（案）について (5) 令和2年度後期授業「SDGsをまなぶ」に係る報告について

### □ 運営委員会 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
令和2年6月12日（金） 午後5時40分～午後7時10分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【開会】 (1) 令和2年度運営委員等の紹介 【協議・報告等】 (1) 令和2年度機構人事について (2) 令和2年度の取組について (3) 令和2年度前期教養教育共同化授業の履修登録者の状況について (4) 三大学教養教育共同化意見交換会について (5) 両センターの活動について (6) 令和3年度学年暦の対応について (7) 新型コロナウィルス感染症対策等について
令和2年12月1日（火） 午後4時10分～午後5時40分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和2年度後期教養教育共同化授業の履修登録者の状況について (2) 令和2年度教養教育単位互換科目の状況 (3) 令和3年度学年暦について (4) 令和3年度共同化科目について (5) 令和3年度 LMS 等の対応について (6) 令和3年度事業計画及び予算について (7) 令和2年度後期試験の対応について (8) 京都府公立大学法人令和3年度計画案のヒアリングについて
令和3年3月24日（水） 午前10時00分～午前11時30分	教養教育共同化施設 「稻盛記念会館」 2階 会議室	【協議・報告等】 (1) 令和3年度共同化科目について (2) 令和3年度予算（案）・事業計画（案）について (3) 「共同化科目担当教員の授業実施に当たっての留意事項」について (4) 三大学教養教育共同化の現状と今後の課題について

編集行  
発行



京都三大学  
教養教育研究・推進機構  
Institute of Liberal Arts and Sciences

所在地：〒606-0823 京都府京都市左京区下鴨半木町1番5  
教養教育共同化施設「稻盛記念会館」内

T E L : 075-703-4925

F A X : 075-703-4979

H P : <http://kyoto3univ.jp/>

発行日：令和3年3月

デザイン：株式会社 谷印刷所